令和元年度

京都大学書道部 第百二十四回書展

禅展

十二月十四日（土）・十五日（日）

十時～十七時

（十五日は受付十六時まで）

建仁寺 西来院・禅居庵

巻頭に寄せて

皆さんは芸術と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。絵画や彫刻、音楽でしょうか。一括りに定義できるものではないかもしれませんが、書道もそのうちに入っているはずです。

私は書道を始めるまでに、先に挙げた芸術と呼べるようなものを多少かじってきたのですが、最近書道について考えていると、書道とこれらがいくらか通じているということをよく感じます。同じ芸術という枠組みなのだから当たり前かもしれませんが。

たとえば、書道では古典を手本として書くいわゆる臨書が基本となってきますが、これは絵画において何かの風景なり古人の作風なりを見ながら描いたり、音楽において誰かの演奏を研究したりすることと似ています。模倣芸術が高く評価されるこのような模倣と芸術は切っても切れない関係です。模倣するだけでは真似になってしまいます。先人の成し遂げたものに倣うのみならず、その段階を超越して芸術としての価値を持たせるのは、どんな分野においても難しいことです。ただ、この過程は高みを目指すために必要不可欠です。

また、芸術は、精神的なものとのかかわりも大きいです。芸術作品を見た時心が動かされるという感覚は誰しもあるでしょうし、制作する側にとっても、芸術は自らの感情を外部に訴える手段となり得ます。書作品をつくるとき、単に文字を書き連ねるだけでなく息遣いまで意識しながら書くことは、楽譜に書いてある発想記号に沿って演奏に感情を載せることと似ています。模倣するときも、その対象に思いを馳せれば、完成度の高い作品が目指せるでしょう。

ここまで、書道と他の芸術について類似点を見てきましたが、日本の文化としての書道と西欧の芸術とを比較する視点に立ってみます。書道の「道」が、精神性を表しているといわれていることから考えると、芸術としての価値のある作品をつくるための自分と向き合う時間に重きを置いている点が、西洋にはない日本の芸術の特徴といえるのではないでしょうか。限りなく完全なものを目指して、できることならいつまでも完成形を追い求めていたい、これが日本人の心なのではないでしょうか。

書道だけでなく、芸術の他分野にも目を向けることで、芸術としての書の本質を見ることができる気がします。

最後になりますが、今回も書展を無事に開催できるのは顧問の宇佐美文理教授と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとした多くの方々のおかげです。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

そして、ご来場者の皆様、本日はご多忙のところ第百二十四回冬樟展にお越しいただき、誠にありがとうございます。芸術としての美を追求した部員の作品たちを、存分にお楽しみいただければと思います。

令和元年十二月吉日

京都大学書道部　部長　秋友祥香

書道部員が大学図書館に就職したら

行友　三輪子（書道部ＯＧ・京都大学人文科学研究所図書掛主任）

就職したら、書道はいつ役に立つと思いますか。

まず頼まれるのが祝儀袋や不祝儀袋の表書きですが、年に数回もありません。手紙や封筒の宛名書きは、パソコンで印刷するかボールペンです。大学では学会等の立て看板がありますが、最近毛筆は見なくなりました。

そんな中、大学図書館に就職した私に、書道が役に立つ場面がやってきました。「題箋筆耕」です。

題箋とは、和本の表紙や収納容器（帙）に貼られている、書名を記した紙のことです。帙を新調すると、帙の背や表紙に新しく題箋を貼る必要が生じます。そこで、私に題箋筆耕の役が回ってきました。

しかしマニュアル等はなく、書庫で実物を見ても、書体も書風もバラバラです。困った私は、本の修復業者のもとで題箋筆耕経験のある先輩に教えを乞いました。

題箋に第一に求められるのは「読みやすさ」です。最終的に、私の目指す題箋は次のようなものになりました（図書館としての見解ではなく、単なる私の好みです）。

一「書体は楷書」
二「墨は、滲みやかすれが出ない程度に濃く」
三「字の大きさを統一」
四「字の重心は中央または低め」
五「線の太さは最低2ミリ以上」
六「横画は左右対称（起筆と収筆が同じラインで揃う）」

一・二・三・五は視認性、四・六は字の安定感が狙いです。

実際に書いてみて、最も苦労したのは六です。私は横画を思い切り右に上げる癖があり、そうすると四でいう字の重心が左下に偏り、落ち着きのない印象になります。横画を右に上げても、後半で同じだけ右下に下げて収めれば、左右対称となり、どっしりとした安定感が出ます。

実は、この六項目を全て満たすと、活字に近づきます。如何にのっぺりした印象を脱し、字に生き生きとした息遣いを与えるか。そこで元書道部員の腕が試されます。

現在は、帙の作成業者が題箋を印刷してくれるようになり、題箋筆耕の機会は無くなりました。書庫でふと自分の書いた題箋を見つけると、これが未来に引き継がれることを思い、恥ずかしいやら勿体ないやら……思わず震えてしまいます。

読める作品

寺本蒼玄（京都大学書道部技術顧問）

三十年ぐらい前より、いろいろな公募展等に、漢字仮名交じりの文章や言葉を書いた作品が目立つようになり、その部門を設けている公募展が見られるようになりました。

私の所属していた読売展や日展等も、この調和体の作品を出品する人が多くなりました。

その当時、村上三島先生が読めない、又は読みづらい作品ばかりでは、観に来て下さる方が楽しくないと考えられて、読める観易い作品を出品してみようと、漢字仮名交じり文（調和体）の作品を出品する部門をお創りになりました。

読売展での調和体の部門では、まず中学生程度が読めることとして、漢字は楷書、行書に定められ、仮名は変体仮名は読みづらいとして不可。三字以上の連綿も使わないようにと規定されて始まりました。

クラブの人達も、調和体の作品を創る場合、第一に読み易い作品であることを中心に、多くても三十字前後の字数の短い文章や言葉を書いてみましょう。長い文章は読むことに疲れます。注意しましょう。

最後に、作品は出品する時期に合わせて、季節感のある文章や言葉を書くようにすると、鑑賞者には楽しみ易いと思います。子供からご老人まで鑑賞に耐えうる作品を書いて下さい。

作品制作の方法——臨書と創作

書作品を作る方法には、臨書と創作の二つがあります。

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それをまねて書くことを臨書といいます。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのがよいとされます。

(1)**形臨**　文字の形や筆づかいを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2)**意臨**　形にこだわらず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写し取ったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3)**背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、ひとつの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

＊

臨書の対象となる古典を法帖ということもあります。はじめから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品のそばに臨書した部分の法帖を掲示していま す。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作といいます。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体・書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を生かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

やみくもに言葉を書くのではなく、自らの感動や思いを言葉に託し、それに合った表現の方法を探して書くのが創作作品です。

作品の構成——印と落款

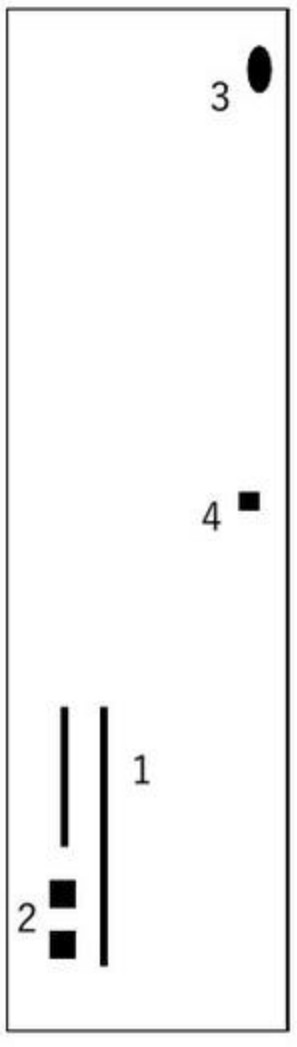
書作品の紙面は本文のほか、いくつかの要素からなっています。

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印のことです。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、制作した時間や場所を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。また印は刻り方によって、文字の線を刻った白文印と、文字の線以外の部分を刻った朱文印に分けられます。



1 落款
2 落款印
3 引首印
4 遊印

書体について

書作品のジャンルは、使う文字によって漢字・仮名・漢字仮名交じりなどに分けることができます。漢字の書体には篆書・隷書・楷書・行書・草書の五つがあり、篆書から隷書が、隷書から草書・行書・楷書が生まれたとされています。同じ書体でも、書風（文字のもつ雰囲気）は作品によってさまざまです。



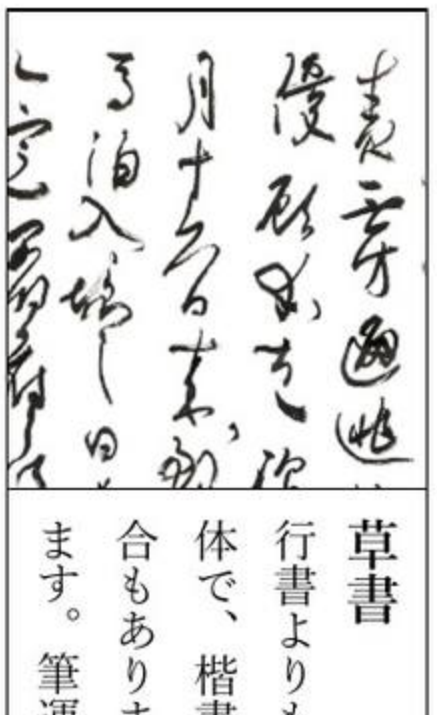
楷書

一点一画を続けずに離して書く書体で、起筆・送筆・収筆の筆づかいがはっきりしているのが特徴です。南北朝時代から発展し、唐代に完成しました。整った美しさをもつ書体です。



行書

曲線的で柔らかい運筆により、点画を続けて書く書体です。楷書に近いものから草書に近いものまでくずし方の程度はさまざまで、行書と草書を交えて書く行草書による作品もあります。



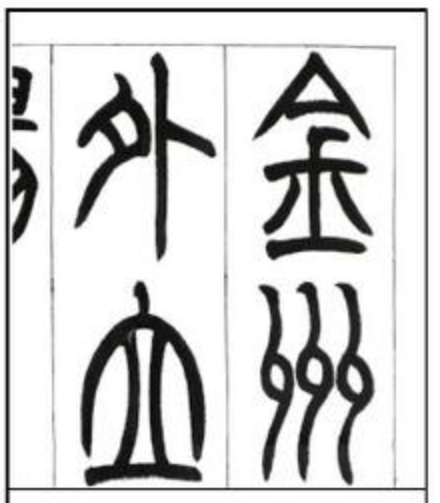
草書

行書よりもさらに大胆な簡略化が行われている書体で、楷書や行書とは字形が大きく違っている場合もありますが、くずし方には一定の規則があります。筆運びのリズム感が魅力です。



隷書

楷書が成立する以前、漢代に公式な書体として用いられました。扁平な字形と水平な横画、画の終わりに現れる「波磔」の筆づかいなどが特徴で、古風な魅力があります。お札に使われている書体です。



篆書

殷の時代から使われた最も古い書体で、甲骨文・金文・小篆などを含みます。漢字の成り立ちを反映した複雑な字形を保っており、均質な線で描かれるのが特徴です。現代では印章などにみられます。



仮名の書

書道では主に平安時代のひらがなの書を指します。連綿（続け書き）や散らし書きによる繊細で流麗な表現は漢字の書にない特色です。今のひらがなとは異なる文字（変体仮名）も使われます。



漢字仮名交じりの書

戦後になって普及したジャンルで、「近代詩文書」「調和体」と呼ばれることもあります。詩・短歌・俳句といった文学作品や歌の歌詞など、身近な題材で表現できるのが魅力です。



篆刻・刻字

篆刻とは石に文字を刻んで印を作ることです。書体は主に篆書が使われます。書道では名前の印を作品に押すほか、印自体が作品となることもあります。刻字は木などの板に文字を刻すことです。

書家説明集

文責：坂崎亜実

▶王羲之(303?～361?、東晋)

「書聖」と呼ばれ、楷行草いずれの書体にも長けていました。唐の太宗にもその字を気に入られたと言われています。王羲之本人が書いたとされる真蹟は残っていませんが、**『蘭亭序』**や**『十七帖』**、**『集字聖教序』**(臨：内田、北田、寺田、豊永)など多くの書の写しが伝わっています。

▶褚遂良(596～658、唐)

欧陽詢(臨：中村(勇)、野宮)、**虞世南**とあわせて初唐三大家と言われています。王羲之の書を学びました。起筆の逆筆、線の太さや抑揚が特徴的で、彼の書法は褚法と呼ばれることもあります。代表作は**『雁塔聖教序』**(臨：片岡)、**『孟法師碑』**(臨：穴田)などがあります。

・その他の臨書作品：秋友

▶蘇軾(1037～1101、宋)

宋の四大家の一人に数えられます。**顔真卿**(臨：豊留、野口)や**懐素**の書の精神性を学びとり、独自の書風を展開しました。中国料理の東坡肉（トンボーロー）という料理の「東坡」は蘇軾の号で、蘇軾がこの料理を好んで食べたためにこの名前が付いたと言われています。代表作は**『黄州寒食詩巻』**、**『赤壁賦』**などがあります。

・その他の臨書作品：岩田

▶黄庭堅(1045～1105、宋)

蘇軾の弟子であり、蘇軾同様、宋の四大家の一人です。代表作には**『松風閣詩巻』**や蘇軾の『黄州寒食詩巻』に寄せた跋などがあり、黄庭堅はその跋を書いた時、その蘇軾の詩について「李白も及ばないところがあるかもしれない」と評しています。

・臨書作品：小笠原、平井

▶文徴明（1470～1559、明）

明代を代表する能書家の一人です。晋・唐・宋・元の書を学び、その温和な人格を彷彿させるような平明典雅な書風で知られています。主に**趙孟頫**（臨：松岡）の作品を模範とし、また王羲之・黄庭堅の書風も学んでいます。

臨書作品：坂本

▶楊峴（1819～1896、清）

清代随一の隷書の名手である彼は、その個性的な書風で知られています。穂先の微動による生き生きとした線や、独特な波磔が特徴です。弟子に、近代篆刻の祖である**呉昌碩**（臨：杉山）がいます。

臨書作品：石田

【参考文献】『書家 101』石川九楊・加藤堆繁、新書館、2004 年
『中国書道史の 10 人』芸術新聞社、1996 年

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『讀書有至味』……10　10
　　創作・『思無邪』……10

一回生

石田七彩　臨書・楊峴『臨乙瑛碑』……17
乾未樹　臨書・嵯峨天皇『李嶠雑詠残巻』……29
大橋明日香　臨書・米芾『苕溪詩巻』……30
片岡美緒　臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……19
釜田弘一朗　臨書・作者不詳『牛橛造像記』……31
栗原瑞樹　臨書・金農『金冬心文語』……20
近藤毅　臨書・作者不詳『爨宝子碑』……12
関美乃　臨書・嵯峨天皇『哭澄上人詩』……33
豊留まり　臨書・顔真卿『自書告身』……34
松岡柚花　臨書・趙孟頫『酔夢帖』……15

二回生

秋友祥香　臨書・褚遂良『楷書千字文』……17
穴田小恵　臨書・褚遂良『孟法師碑』……28
伊藤迅亮　創作・『近作四絶』……28
岩田恵理子　臨書・蘇軾『寒食雨二首』……18
内田鈴菜　臨書・王羲之『集字聖教序』……29
小笠原萌葉　臨書・黄庭堅『黄州寒食詩巻』……18
岸根葵葉　臨書・作者不詳『史晨後碑』……19
北田綾　臨書・王羲之『集字聖教序』……20
坂崎亜実　臨書・作者不詳『乙瑛碑』……32

三回生

石本森羅　臨書・作者不詳『張猛龍碑』……17
　　創作・『玉階怨』……28
市川拓真　臨書・金農『祥雲』……28
鵜川大輝　創作・『筍』……13
大橋葵　臨書・藤原佐理『離洛帖』……12
小池莉穂　臨書・小野道風『屏風土代』……32
越田真由　臨書・智永『真草千字文』……31
坂本和歌子　創作・『桃源洞裡』……29
寺田奈津美　臨書・文徴明『南楼傷春詩』……18
中岡大吉　臨書・王羲之『集字聖教序』……11
野田恵子　創作・『世界中の誰よりきっと』……17
松尾有輝也　創作・『未熟』……28
安田直記　創作・『塞翁が馬』……17
吉田凌祐　創作・『體暢心逾静』……16
　　創作・『月』……23
　　創作・『令和―梅花歌卅二首并序―』……38

四回生

覚道直治　創作・『KYOTO』……11
金山優作　創作・『幽州夜飲』……30
中村勇真　創作・『送友人』……19
　　臨書・何紹基『行草山谷題跋語四屏』……31
挟間優美　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……14
一二暉生　創作・『蘇軾詩』……14
平井達也　臨書・鍾繇『薦季直表』……34
別府華　創作・『臨高臺』……36
村上友梨　臨書・黄庭堅『出宮賦』……36
森ちひろ　創作・『純心』……22
　　臨書・米芾『蜀素帖』……23
　　創作・『凡夫』……37

修士一回生

小林由佳　創作・『風花』……32
仲村康太郎　創作・『夢雨』……21
　　創作・『毓』……34
長谷佳菜子　創作・『望雪』……34
原田拓実　創作・『村上天皇の歌』……35
原誠人　臨書・『篆書の研究』……35
平野晶子　臨書・作者不詳『元楨墓誌銘』……15

修士二回生

矢野凱己　創作・『夏の終り』……24
　　創作・『月を詠む』……38
山口和樹　創作・『人盡楽』……25

博士課程修了

藤井基弘　創作・『雨ニモマケズ』……11

合作

阿部朱夏／原誠人　創作・『ray』……27
勝野初紀／金山優作　創作・『日進月歩』……27
勝野初紀／平井達也　創作・『斜陽』……27
金山優作／佐山侑莉　創作・『光陰流水』……40
坂本和歌子／松尾有輝也／安田直記　創作・『三×三×三』……26
中村勇真／原誠人　創作・『筆致之妙』……26
挟間優美／森ちひろ　創作・『道楽』……26
矢野凱己／山口和樹　創作・『永遠に』……25
二回生合作　創作・『創作漢字』……39
四回生合作　創作・『「私」の扇子』……25
全体合作　創作・『百人一首』……39

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品

『讀書有至味』　銭肇修

「読書至味有り」

至味は無上の楽しい味わい。傅山風に豪快に書き流してみました。



○禅居庵作品

『思無邪』　論語

「思い邪無し」

心すなおにしてわだかまりなし。力強さを表現する為に清の趙之謙風に書きました。



○西来院

1

鵜川大輝　三回生
創作　行草書　『筍』　二尺×八尺

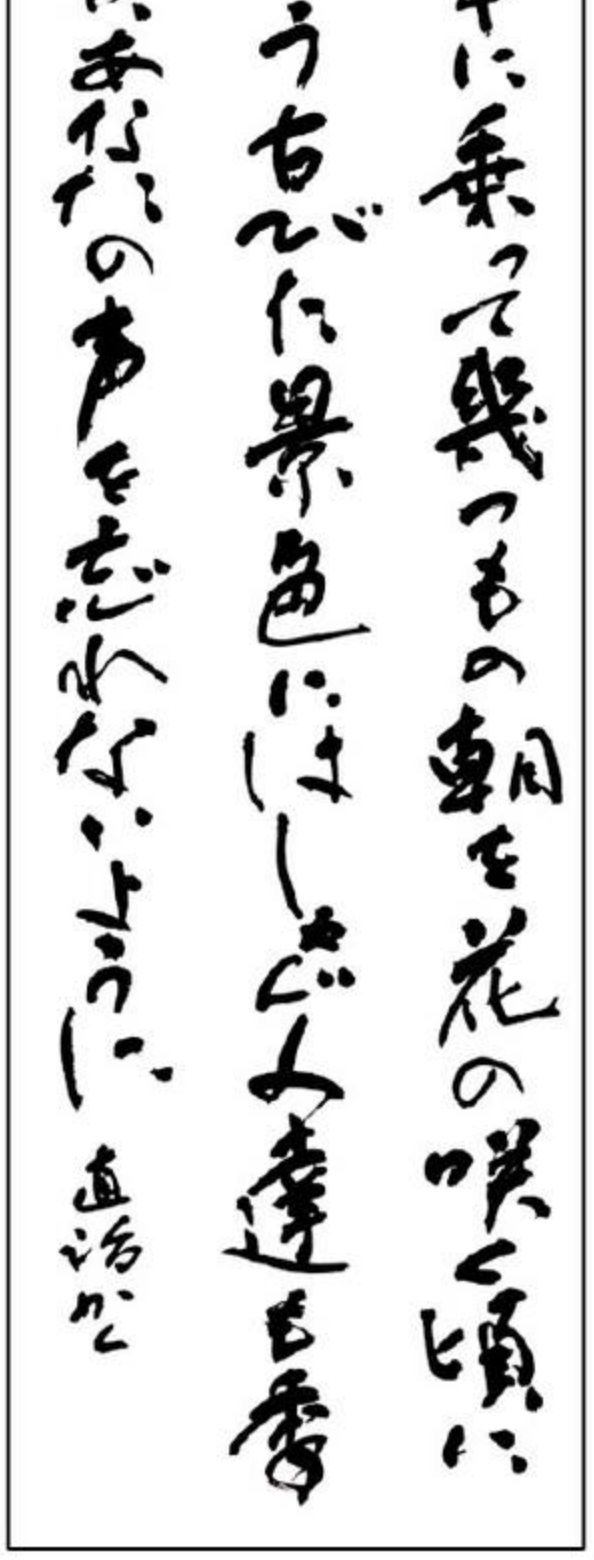


「此州乃竹郷、春筍滿山谷。山夫折盈抱、抱來早市鬻。物以多為賤、雙錢易一束。置之炊甑中、與飯同時熟。紫籜坼故錦、素肌擘新玉。毎日遂加餐、經時不思肉。久為京洛客、此味常不足。且食勿踟躕、南風吹作竹。」

行等にとらわれず書きたいように書くと、字形から何から無茶苦茶な作品になってしまいました。同時に楽しい作品になっていれば良いのですが。たけのこ食べたい。

2

覚道直治　四回生
創作　調和体　『KYOTO』　二尺×八尺



「逢いに行くわ汽車に乗って幾つもの朝を花の咲く頃に
鴨川超えて急ごう古びた景色にはしゃぐ人達も季節
節が変わる前にあなたの声を忘れないように」

「逢いに行くわ汽車に乗って幾つもの朝を花の咲く頃に」

JUDY AND MARY の「KYOTO」という曲です。曲の雰囲気に合った作品作りを心掛けました。同期のみなさんへ、また京都に集まって一緒に呑みましょう。（できれば桂駅前で）

3

近藤毅　一回生

臨書　楷書　作者不詳『爨宝子碑』　二尺×八尺



「耀与雲揚。鴻漸羽儀。龍騰鳳翔。矯翮淩霄。将賓平王。鳴鸞紫闥。濯纓滄浪。庶民子来。縶維」

あったかくてどこか面白い、字の表情に魅かれて選びました。雰囲気が伝わるような作品になってくれていると嬉しいです。

4

坂本和歌子　三回生

臨書　行書　文徴明『南楼傷春詩』　二尺×八尺



「南楼三月盡、飛絮滿江城。野色烟中斷、斜陽雨外明……（略）」

初めての二八作品です。二回生で一部を書いたことがあるのですが、再挑戦しました。その頃よりは少しでも成長していると思いたいです。

5

洲鎌英行　二回生
臨書　行書　劉墉『行書臨古帖』　二尺×八尺

「裴相行……揶書」
劉墉さん、ハラショーですわ。



6

寺田奈津美　三回生
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　二尺×七尺

「盖聞儀有像……識其」
『集字聖教序』は、唐の太宗が玄奘の訳した仏典に付した序文などを、僧懐仁が王羲之の行書から文字を集めて石碑に彫ったもので、王羲之の行書を最も正しく伝えるものとして有名だそうです。書いていて心地よい書風ですが、その雰囲気を再現するのは難しかったです。

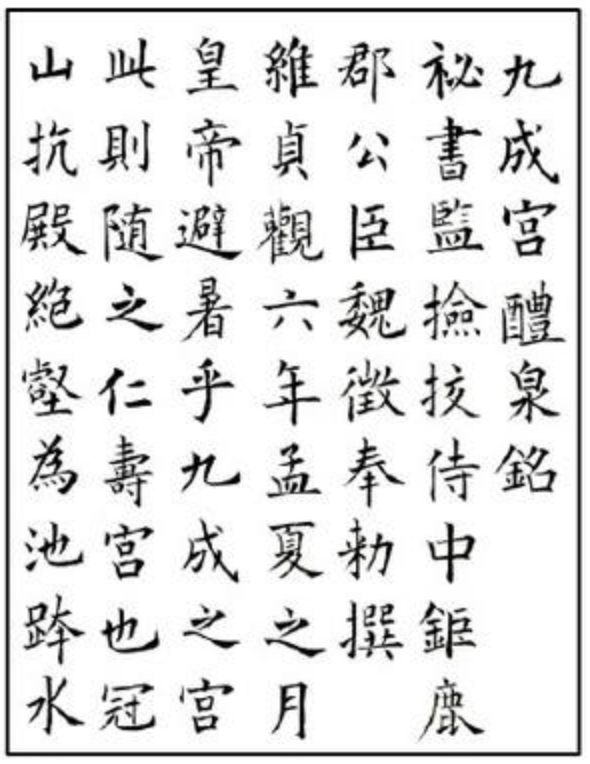


7

中村勇真　四回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　三尺×六尺

「九成宮醴泉銘祕書監撿校侍中鉅鹿郡公臣魏徵奉敕撰維貞觀六年孟夏之月皇帝避暑乎九成之宮此則隋之仁壽宮也……（略）」

学部四年間は毎書展ごとに必ず楷書作品を出品してきましたが、学部最後の書展の締めくくりとして、入部時からの目標であった九成宮醴泉銘の全臨をしました。計算し尽くされた字形による構成美と、それ故のごまかしの効かない厳しさとが楷書の魅力なのです。



（部分掲載）

8

中村勇真　四回生
創作　行書　『蘇軾詩』　二尺×八尺

「黒雲翻墨未遮山白雨跳珠乱入船巻地風来忽吹散望湖楼下水如天」

京大書道部ではあまり見かけない二八二行＋長落款の構成で創作してみました。品格のある字を書きたいものです。



9

平野晶子　修士一回生
臨書　楷書　作者不詳『元楨墓誌銘』　二尺×八尺

「使持節鎮大将軍相州刺史南安王楨恭宗第十一子皇上之従祖也惟王體暉霄極列耀星華茂徳基於紫……（略）」

最近、京都市内には拓本や原本を所蔵している資料館やお寺さんが多いことに気が付き、学業の合間に足を運んでは安らかな気持ちになりが、大切に守られてきた古典作品に触れることこそが贅沢な時間の過ごし方だなぁと思います。筆を持つこと自体もです

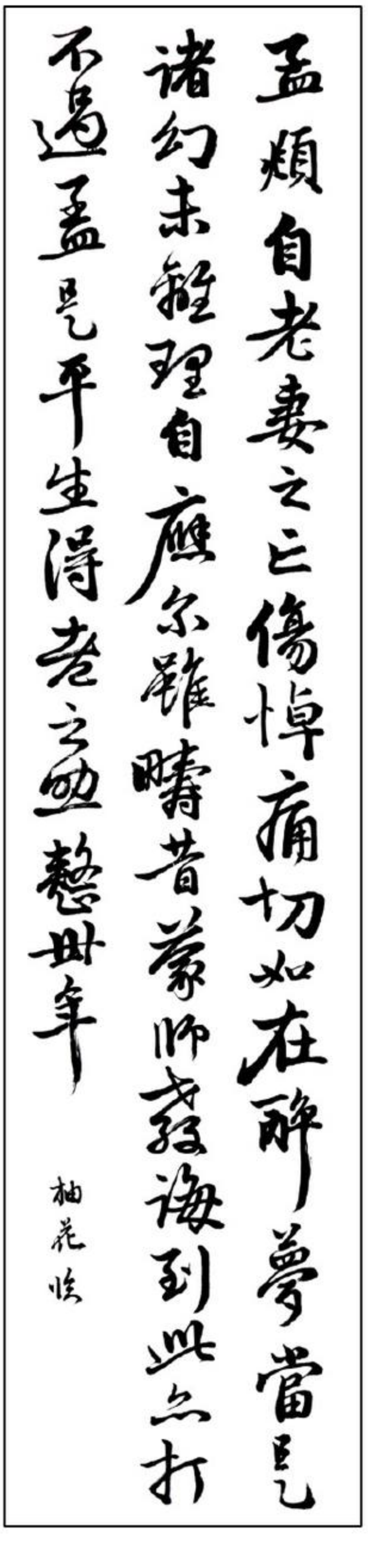


10

松岡柚花　一回生
臨書　行書　趙孟頫『酔夢帖』　二尺×八尺

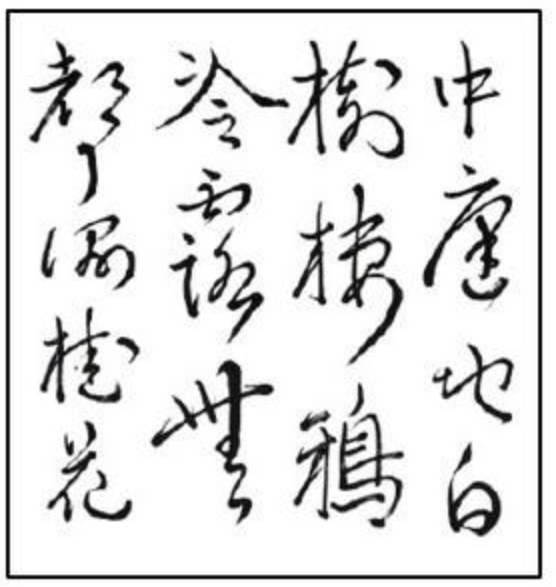
「孟頫自老妻之亡。……（略）」

ご批評よろしくお願い致します。



11

吉田凌祐　三回生
創作　行草書・かな　『月』　二尺×八尺



「中庭地白樹棲鴉冷露無聲湿桂花今夜月明人盡望不知秋思在誰家／夕川支乃ひ可利万佐連里東ほ東保二山のこ多万能可遍る之徒介佐（ゆうつきのひかりまされりとほとほにやまのこたまのかへるしつけさ）。」

毎回の書展でかなと漢字の両方を出品するのが自分の中での決まりですが、最近はかなの創作欲が増して困っています。この一作品でルールは守れましたが、両者のバランスが大変でした。さらに精進せねば。

12

渡部裕貴　二回生
創作　行草書　『秦州雑詩』　二尺×八尺



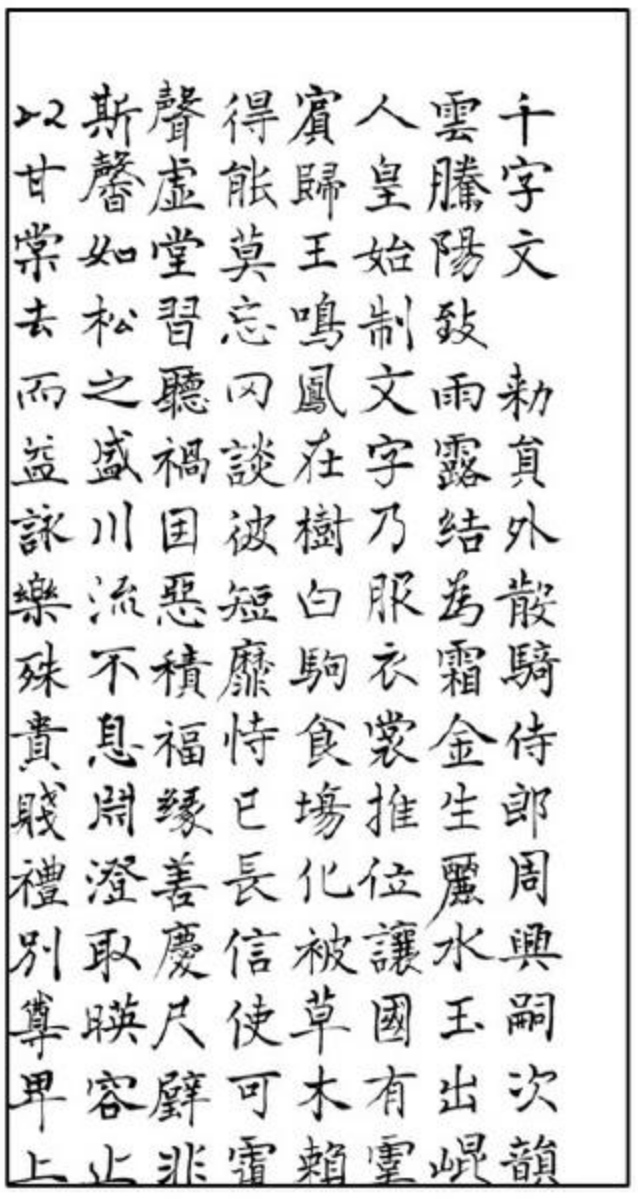
「鳳林戈未息、魚海路常難。候火雲峰峻、懸軍幕井幹。風連西極動、月過北庭寒。故老思飛將、何時議築壇。」

私たち人間はなんのために生まれてくるのか考えながら書きました。

13

秋友祥香　二回生
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切　二連

「千字文。勅員外散騎侍郎周興嗣次韻。天地玄黄。宇宙洪荒。……（略）」楷書とは言えどもたまに柔らかい変わった線がでてきて、お気に入りの古典の一つです。褚遂良作とはなっていますが、本当にその筆なのかはよく分かっていないそうです。


千字文　勅員外散騎侍郎周興嗣次韻
雲騰陽致雨露結為霜金生麗水玉出崑岡
人皇始制文字乃服衣裳推位讓國有虞陶
賓歸王鳴鳳在樹白駒食場化被草木賴及
得能莫忘罔談彼短靡恃己長信使可覆器
聲虚堂習聽禍因惡積福緣善慶尺璧非寶
斯馨如松之盛川流不息淵澄取映容止若
以甘棠去而益詠樂殊貴賤禮別尊卑上

（部分掲載）

14

石田七彩　一回生
臨書　隷書　楊峴『臨乙瑛碑』　半切

「臣愚以爲。如瑛言。孔子大聖。則象乾坤。爲漢制作。先世所奪。祠用衆牲。綬甫仁兄大人法鑒。弟楊峴。臨乙少卿碑。」楊峴が好きです。セブンイレブンの杏仁豆腐と同じくらい好きです。


臣愚以爲如瑛言孔子大聖則
象乾坤爲漢制作先世所奪祠
用衆牲
綬甫仁兄大人法鑒弟楊峴臨乙少卿碑　七彩臨

15

石本森羅　三回生
臨書　楷書　作者不詳『張猛龍碑』　半切

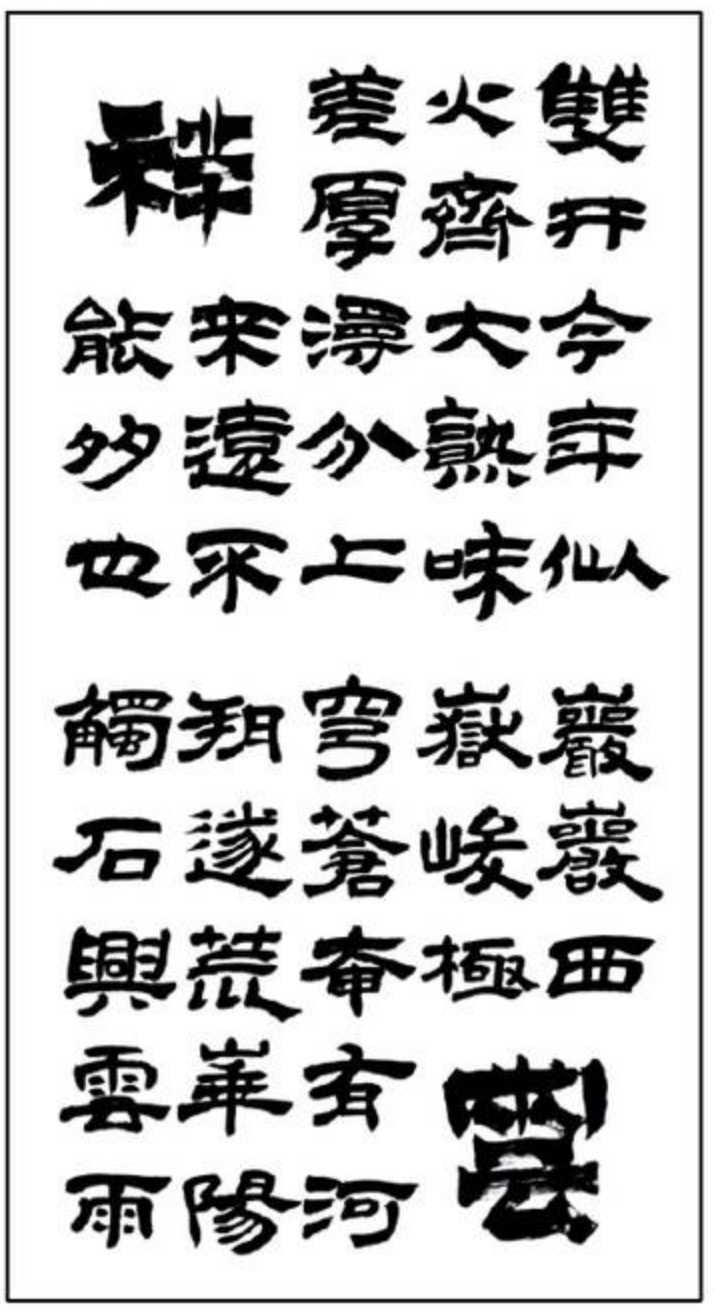
「農桑勧課。田織以登。入境観朝。莫不禮讓。化感無心。草石知變。恩及泉木。禽魚自安。」張猛龍碑は北魏楷書らしい自由で力強い線で構成されている一方、引き締まった結構からは初唐につながる端正さが感じられます。各字の密度感に注意して制作しました。


農桑勧課田織以登入境観朝
莫不禮讓化感無心草石知變
恩及泉木禽魚自安

16

市川拓真　三回生
臨書　隷書　金農『祥雲』　全紙

「祥雲／雙井今……能多也／巖巖西……興雲雨」金農の法帖を見ているとつい全部書きたくなってしまい、一つの作品に三つの法帖を詰め込みました。四角感と丸感の対比がうまく出せていればいいなと思います。


雙井今……能多也／巖巖西……興雲雨

17

岩田恵理子　二回生
臨書　行書　蘇軾『寒食雨二首』　半切

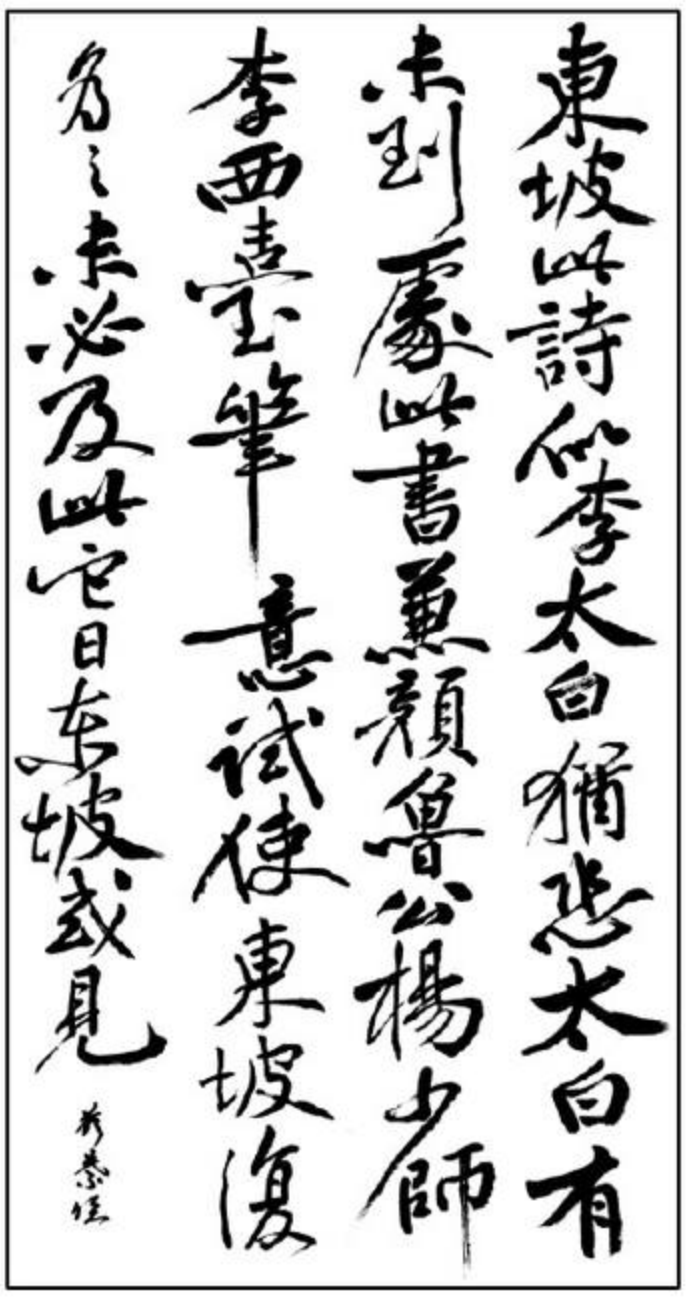
「春江欲入戸、雨勢來不已。小屋如漁舟、濛」
冬っぽい漢字が入った作品にしようと思っていたのですが、初っ端に春が入ってしまいました。



18

小笠原萌葉　二回生
臨書　行書　黄庭堅『黄州寒食詩巻』　全紙

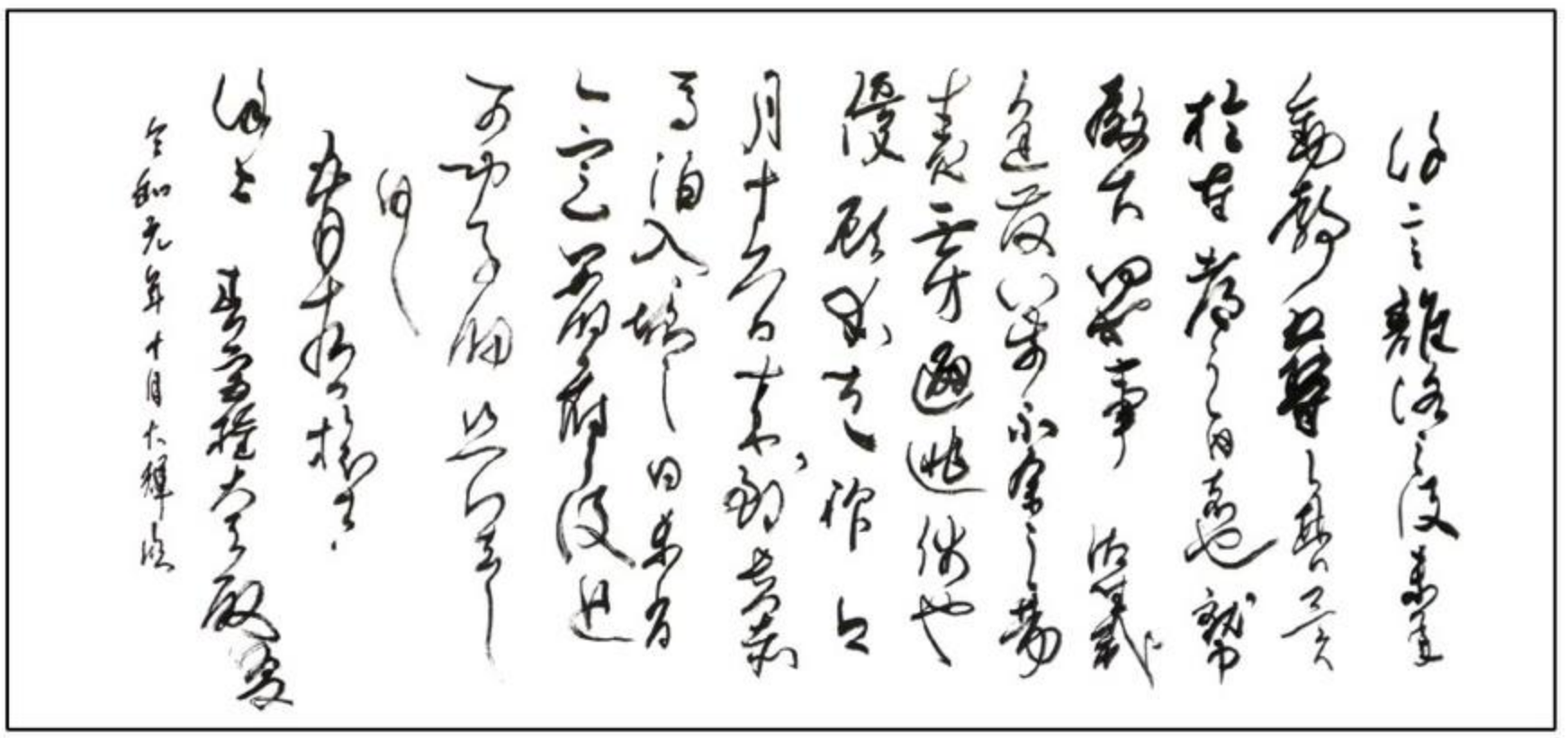
「東坡此詩似李太白猶恐太白有未到処。此書兼顔魯公楊少師李西台筆意。試使東坡復為之未必及此。　他日東坡或見此書」
左右にのびる線がかっこいいなぁと思って臨書しました。そのバランスをとるのが難しかったです。



19

鵜川大輝　三回生
臨書　草書　藤原佐理『離洛帖』　巻子

「謹言。離洛之後。未承動靜。……（略）」
詫び状のはずなのに、こんなに魅力的なのが不思議。その一部でも伝わるように書けたでしょうか。



20

片岡美緒　一回生

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切

「大唐三藏聖教序。大宗文皇帝製。盖聞。二儀有象。顯覆載以含生。四時無形。潛寒暑以化」

高校の時にやったことのある作品を久しぶりにやってみようと思って選びました。高校の時は中筆で書いていたので太筆で書くのは新鮮で楽しかったです。もっと字数を増やしてまた挑戦しようと思います。



21

岸根葵葉　二回生

臨書　隷書　作者不詳『史晨後碑』　半切

「史君饗後。部史仇誧。県吏劉耽等。補完里中。」

一周（？）回って、隷書に戻ってきました！　かわいらしさと力強さを合わせ持つ作品を目指して頑張りました。忙しい毎日ですが、書道も頑張りたいです。



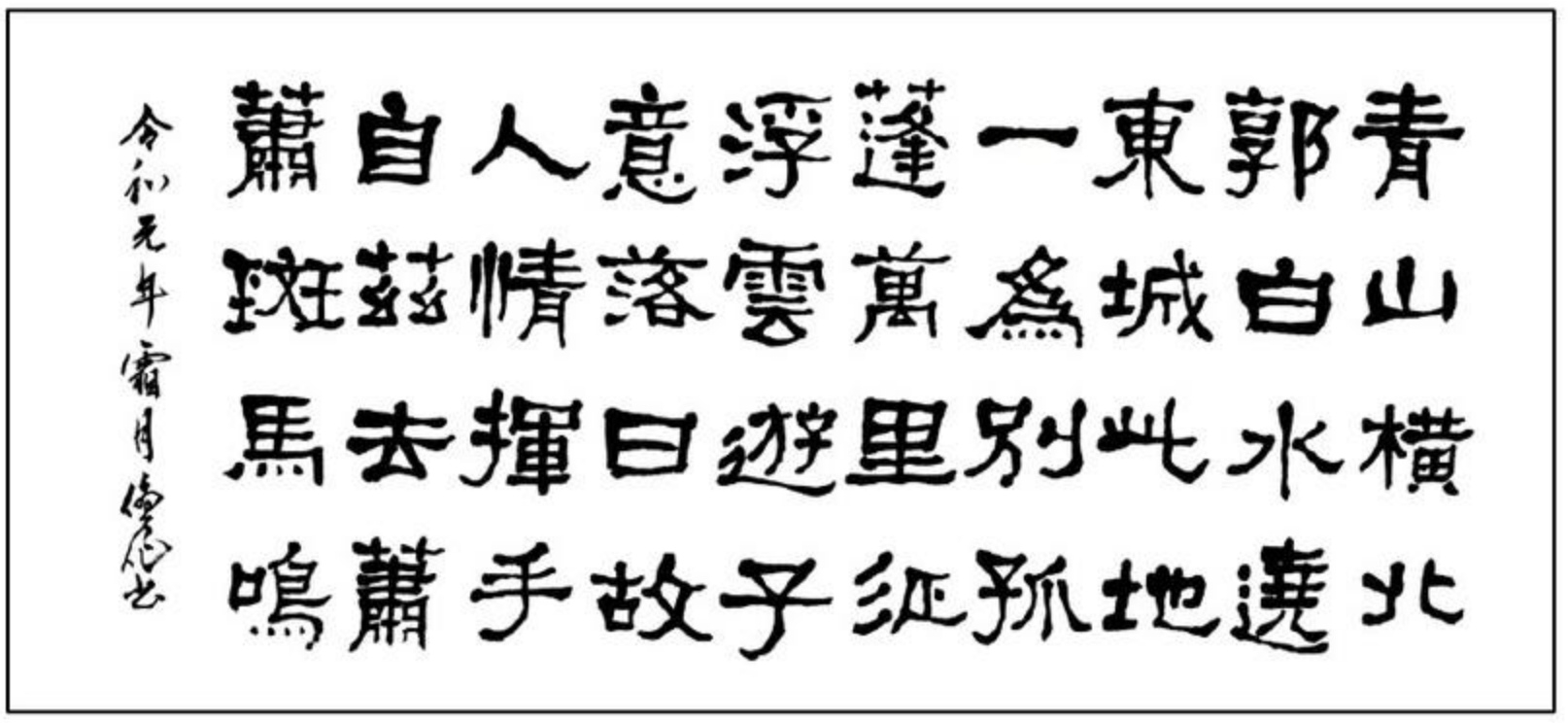
22

金山優作　四回生

創作　隷書　『送友人』　巻子

「青山横北郭白水遶東城此地一為別孤蓬万里征浮雲遊子意落日故人情揮手自茲去蕭蕭班馬鳴」

「手を振って、ここから去って行こうとすると、もの寂しそうな声で、別れてゆく馬が鳴いた。」



23

北田綾　二回生
臨書　楷書　『集字聖教序』　半切

「頻登雪嶺。更獲半珠。問道往還。十有七載。」
大好きなお鍋とおでんの季節になって嬉しいです。



24

栗原瑞樹　一回生
臨書　隷書　金農『金冬心文語』　半切

「度量如海涵春育。……（略）」
金農の書の中では珍しい、人間らしい柔らかさが伝われば幸いです。



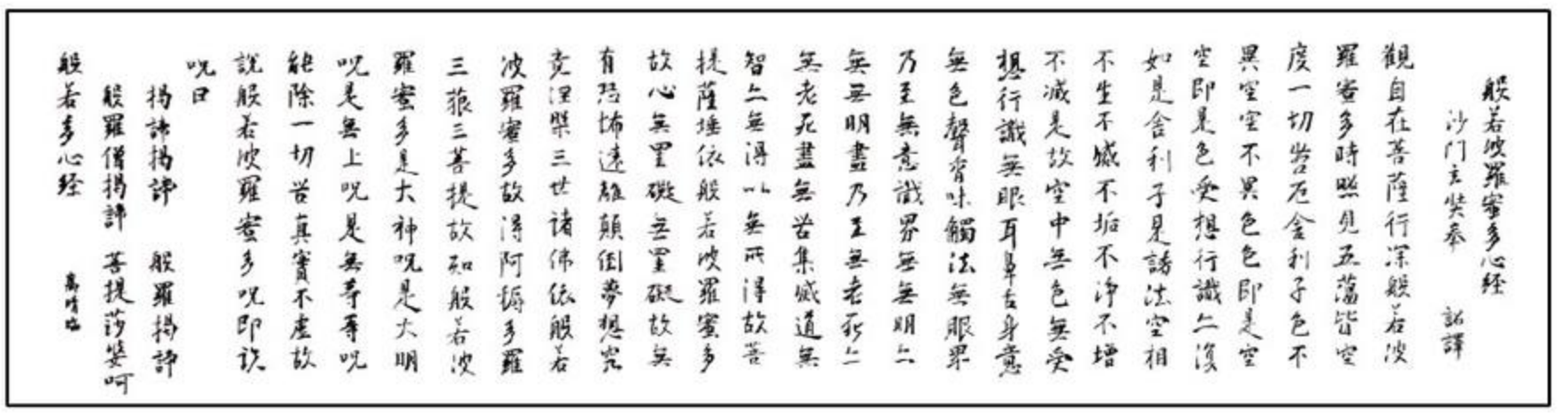
25

柴田達哉　二回生
創作　隷書　『畫龍點睛』　半切横

「畫龍點睛」
こういう系のやつ一度やってみたいなぁと思ってたので、やってやりました。



26　豊永嵩晴　二回生
臨書　楷書　王羲之『集字聖教序』　巻子
「般若波羅蜜多心経……（略）」
写経しました。


般若波羅蜜多心経
沙門玄奘奉　詔譯
観自在菩薩行深般若波
羅蜜多時照見五蘊皆空
度一切苦厄舍利子色不
異空空不異色色即是空
空即是色受想行識亦復
如是舍利子是諸法空相
不生不滅不垢不浄不増
不減是故空中無色無受
想行識無眼耳鼻舌身意
無色聲香味觸法無眼界
乃至無意識界無無明亦
無無明盡乃至無老死亦
無老死盡無苦集滅道無
智亦無得以無所得故菩
提薩埵依般若波羅蜜多
故心無罣礙無罣礙故無
有恐怖遠離顛倒夢想究
竟涅槃三世諸佛依般若
波羅蜜多故得阿耨多羅
三藐三菩提故知般若波
羅蜜多是大神呪是大明
呪是無上呪是無等等呪
能除一切苦真實不虚故
説般若波羅蜜多呪即説
呪曰
揭諦揭諦　般羅揭諦
般羅僧揭諦　菩提薩婆呵
般若多心経

27　中岡大吉　三回生
創作　調和体　『世界中の誰よりきっと』　半切
「憧憬　世界中の誰よりきっと胸に響く鼓動をずっと抱きしめていたい季節を越えていつでも」
今夏にニューヨークに行って感じた気持ちを書にしてみました。


憧憬
世界中の誰よりきっと胸に
響く鼓動をずっと抱きし
めていたい季節を越えて
いつでも

28　仲村康太郎　修士一回生
創作　隷書　『夢雨』　半切二分の一
「夢雨。」
レインメーカー・オカダカズチカ（新日本プロレス）といえば「カネの雨」を降らせる男であるが、ならば私は「夢の雨」を……というのは冗談で、「夢雨」とは晩唐の李商隠の詩中の語。典拠は宋玉「高唐の賦」。二字のもつ朦朧の雰囲気、しっとりとした情趣に私はたまらなく惹かれる。意味は、いま敢えて伏せてもよかろう。


夢雨

29

野田恵子　三回生
創作　金文　『未熟』　47.6cm×70.1cm

「敬和徳經敏朝夕」
敬和徳經敏朝夕は、「人間としての徳性と、物事のあるべき道筋に敬意を払って人と和し、朝に夕に、怠ることなく勉めよ。」という意味です。



30

野宮航太　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

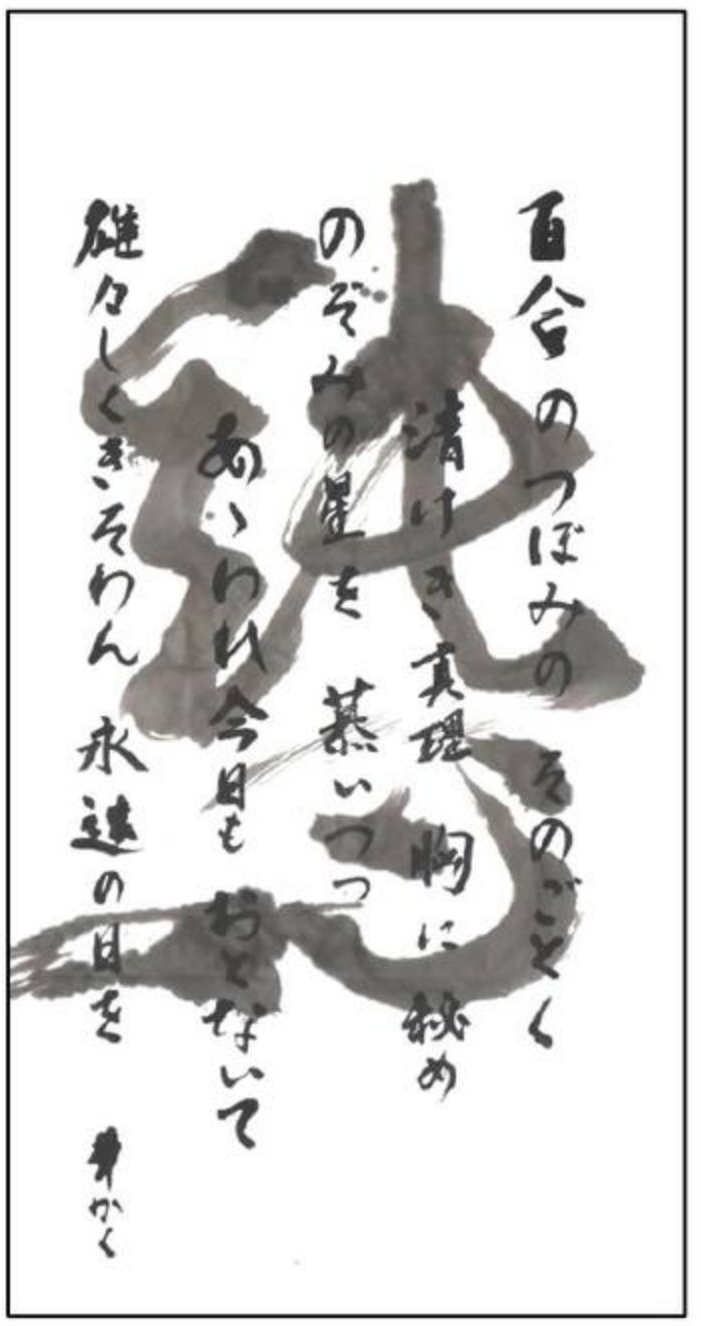
「以文徳懐遠人東越青丘南南踰丹儌」
初めての作品です。『楷書の極則』という言葉に惹かれました。この様な端正で美しい字がいつか書けるようになりたいです。



31

別府華　四回生
創作　調和体　『純心』　全紙

「純心　百合のつぼみのそのごとく清けき真理胸に秘めのぞみの星を慕いつつあゝわれ今日もおとないて雄々しくきそわん永遠の日を」
（多分）人生最後の書道作品になると思うので、私が人生で一番書道をしてきた高校時代の校歌を作品にしました。割と好きです。鹿児島のコテコテのカトリックの女子高でした。お昼ご飯の前は、お祈りしてました。アヴェマリア、恵みに満ちた方～みたいなやつです。挨拶の後には心清きものは幸いなり。って言ってました。



32

松尾有輝也　三回生
創作　行書　『塞翁が馬』　半切三分の一横

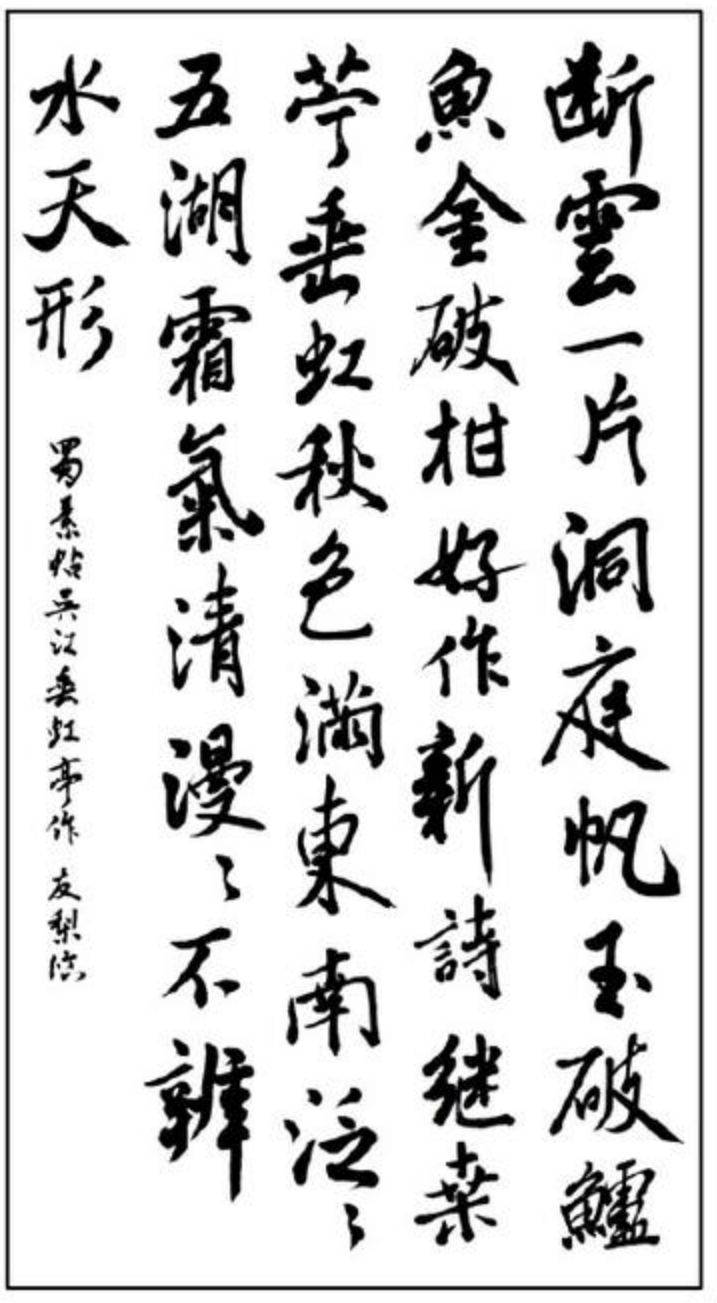
「人間萬事塞翁馬」
初めは草書を混ぜて書いていましたが、誰でも読める作品を書きたくて最終的に全部行書で書くことにしました。



33

村上友梨　四回生
臨書　行書　米芾『蜀素帖』　全紙

「断雲一片洞庭帆玉破鱸魚金破柑……（略）」
初めて米芾の作品を臨書しました。これが書道部員としての最後の作品となります。が、今後も様々なことに挑戦していきたいと思います。



34

森島奈実　二回生
臨書　草書　孫過庭『書譜』　半切

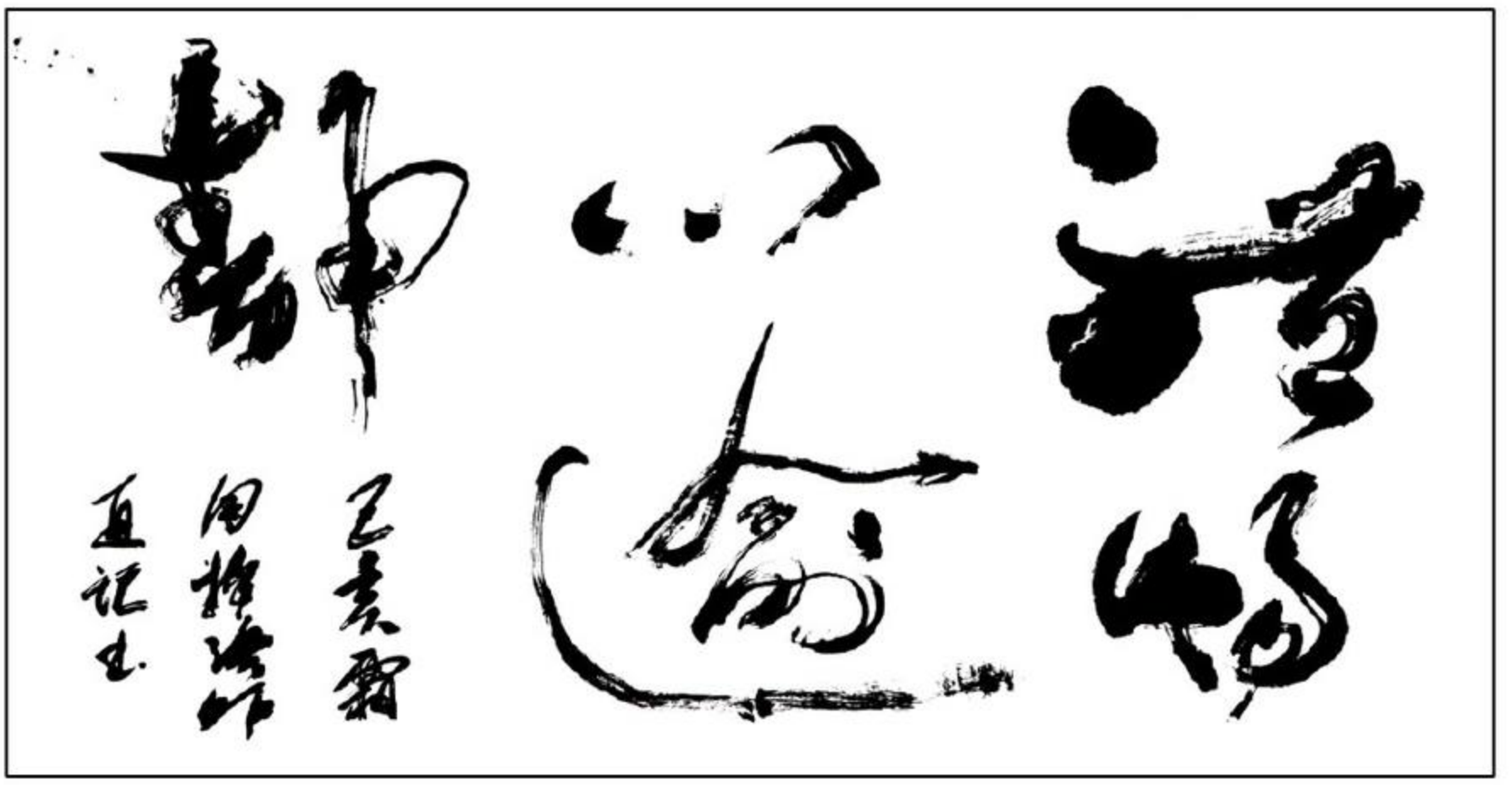
「庶欲弘既往之風規導将來之器識」
初めての書展、初めての作品。はじめて尽くしでした。草書っぽさが出てるといいなあ。



35

安田直記　三回生
創作　行草書　『體暢心逾靜』　全紙横

「體暢心逾靜」
それっぽい雰囲気は出てますでしょうか。



36

矢野凱己　修士二回生
創作　調和体　『夏の終り』　41cm×53cm

「夏は冬にあこがれて　冬は夏に帰りたい」
初夏はあんなに社会人になりたかったはずなのに……。いざこうして最後の冬樟展を迎えると、沢山の思い出が蘇り、あの頃に戻りたいと言ってみたり。とっても楽しい六年間でした。



37

山口和樹　修士二回生
創作　隷書　『人盡楽』　45cm×45cm

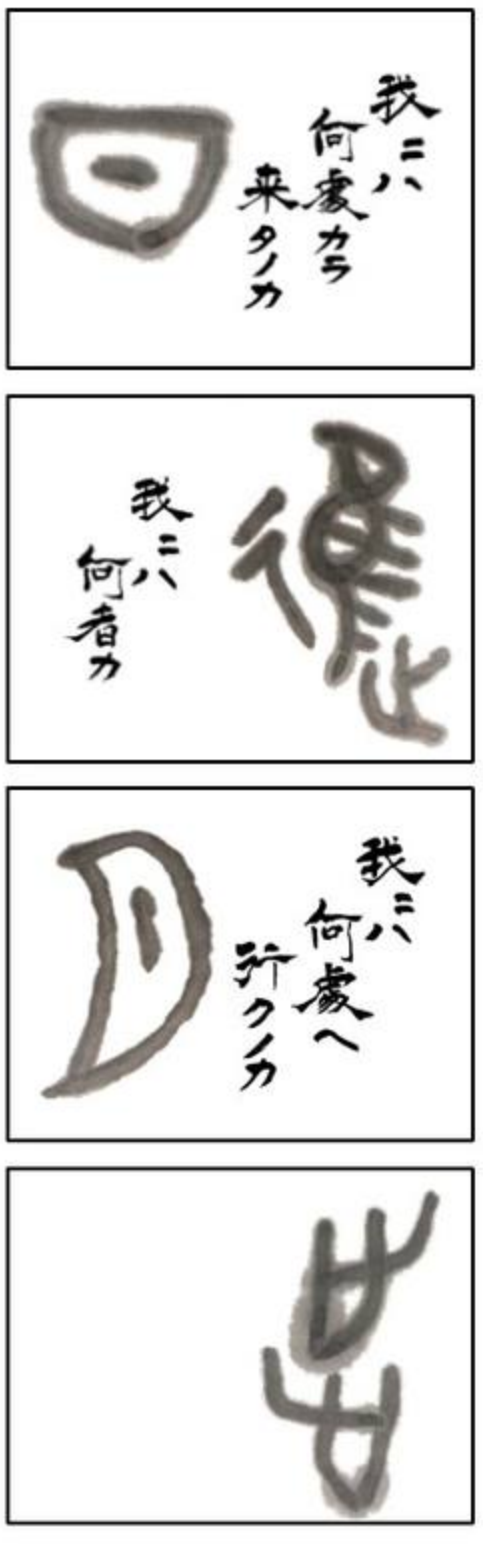
「人盡楽」
本当に楽しみ尽くした
大学生活だったなーと。



38

勝野初紀　四回生・金山優作　四回生
創作　篆書・調和体　『日進月歩』　半切

「日進月歩……(略)」
初めて共に合作をしたのは三年前。それから幾度となく合作をしてきました。今も変わらず書を真剣に語り合える良き友です。そんな私たちの学部最後の合作は「日進月歩」。その名の通り四年間少しずつ進歩した様子が作品に現れていると幸いです。

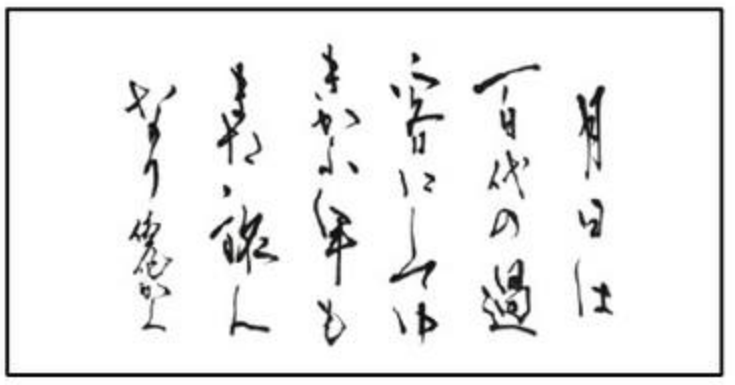


39

金山優作　四回生・佐山侑莉　四回生
創作　行書・篆書・調和体・篆刻　『光陰流水』　半切二分の一横

「光陰流水／月日は百代の過客にしてゆきかふ年もまた旅人なり／夫天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客而浮生若夢爲歡幾何」
時が過ぎ去るのは早いものです。









40

坂本和歌子　三回生・松尾有輝也　三回生・安田直記　三回生
創作　行書　『三×三×三』　半切四分の三横＋三尺×六尺横

「和気動。慶維新。游於藝」

三回生の仲良し三人組で三連の作品を書きました。一枚につき一人一文字書いています。誰が書いたのか当ててみて下さい。正解者にはもれなく飴ちゃんプレゼント！

41

中村勇真　四回生・原誠人　修士一回生
創作　行草書　『筆致之妙』　半切四分の三横＋三尺×六尺横

「筆致之妙」「地険関逾壮。天平鎮尚雄。……（略）」

明治の書家・中林梧竹は『梧竹堂書話』で書美の要件たる概念を列挙した。それは五言対句に「書不可不無此〇〇処」と続けて並べただけの、簡素な、どこか禅的な述べ方であった。今回は特に十一の概念を選び、対応する対句を書き抜いた。「筆致之妙」は梧竹の挙げる羲之書の美点である。書聖への敬慕は、いつも忘れたくない。



42

挾間優美　四回生・森ちひろ　四回生
創作　篆書　『道楽』　53cm×115cm

「道楽」

あえて私たちらしくない感じの作品を目指しました。春からのそれぞれの道も充実したものになりますように。（挾間）

今回も未知の領域に挑戦しました。書道も人生も楽しんだもんがち。（森）

43　二回生合作
創作　『創作漢字』

こんにちは、二回生です。今回私たちは新しい漢字を創作してみました。テーマは『冬』です。それぞれ何を書いたのか想像しながらお楽しみください。

44　四回生合作
創作　『「私」の扇子』

四回生の私たちにとって今年は節目の年となります。作品のスタイル、書の好みはそれぞれ違いますが、「書道」をとともに楽しんできた個性溢れる仲間たちです。そんな仲間たちで扇子を一人一本仕立てました。私たちの「センス（扇子）」を感じて頂ければ幸いです。

45　全体合作
創作　『百人一首』

冬めく日　部員みんなで　書きました　百人一首　ご覧ください

○禅居庵

46　穴田小恵　二回生
臨書　楷書　褚遂良『孟法師碑』　半切

「人宗模楷者已随高租文皇帝閨風而悦」
この作品に取り組むことで臨書の難しさを身をもって感じました。書けば書くほど自分が書きたいものから遠ざかって行くような気がして書き終える度に反省の繰り返しでした。しかしだからこそ近いうちにもう一度挑戦したいと思うようになりました。この作品との出会いを無駄にしないためにも。

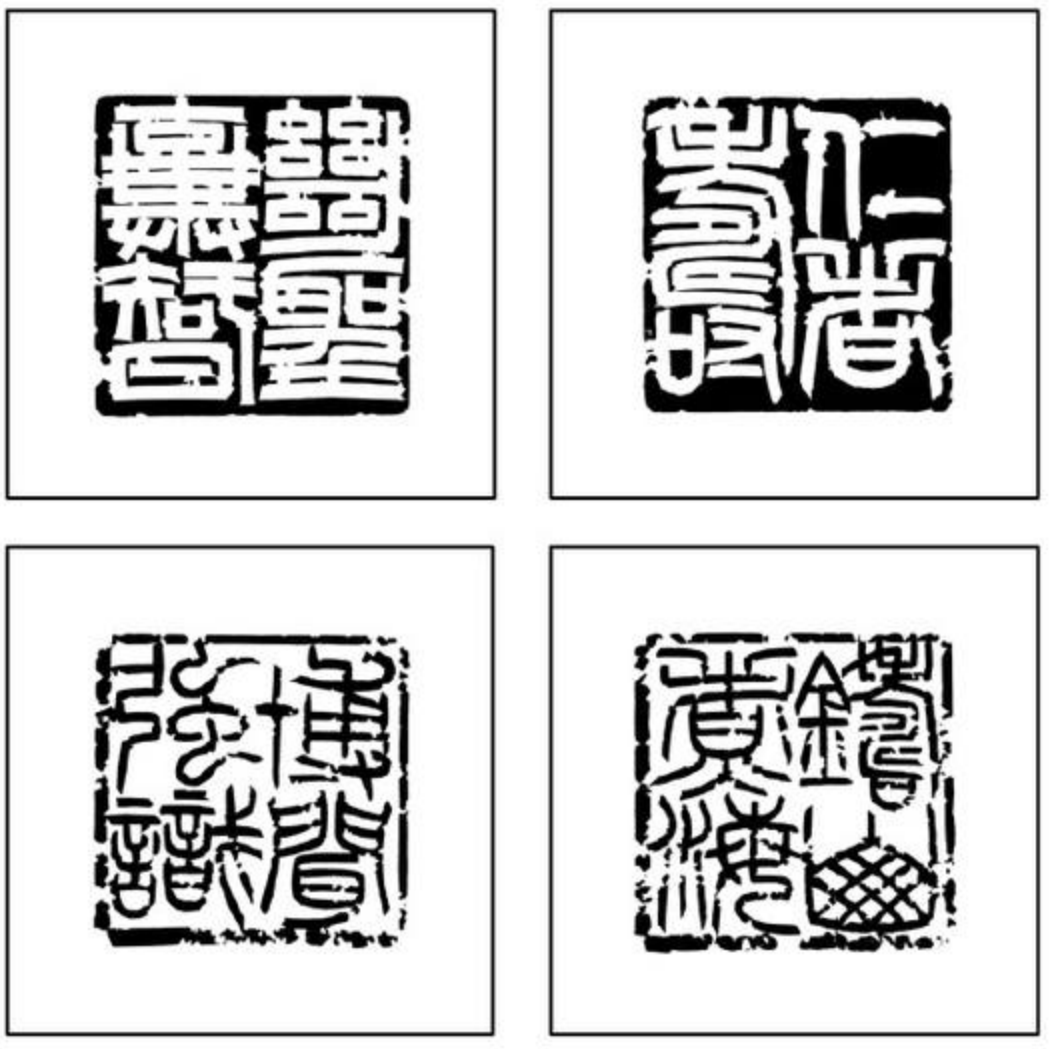


47　石本森羅　三回生
創作　行草書　『玉階怨』　半切

「玉階生白露、夜久侵羅襪。却下水精簾、玲瓏望秋月。」
李白の閨怨詩による創作です。特に詩の内容を意識したわけではないのですが、書いているうちに自然と物寂しげな雰囲気が漂う作品になりました。



48　伊藤迅亮　二回生
創作　篆刻　『近作四顆』　半切二分の一
「仁者壽／鋳山煮海／絶聖棄智／博聞強識」
今年の展覧会へ出品した作品のまとめです。ご批評よろしくお願いします。



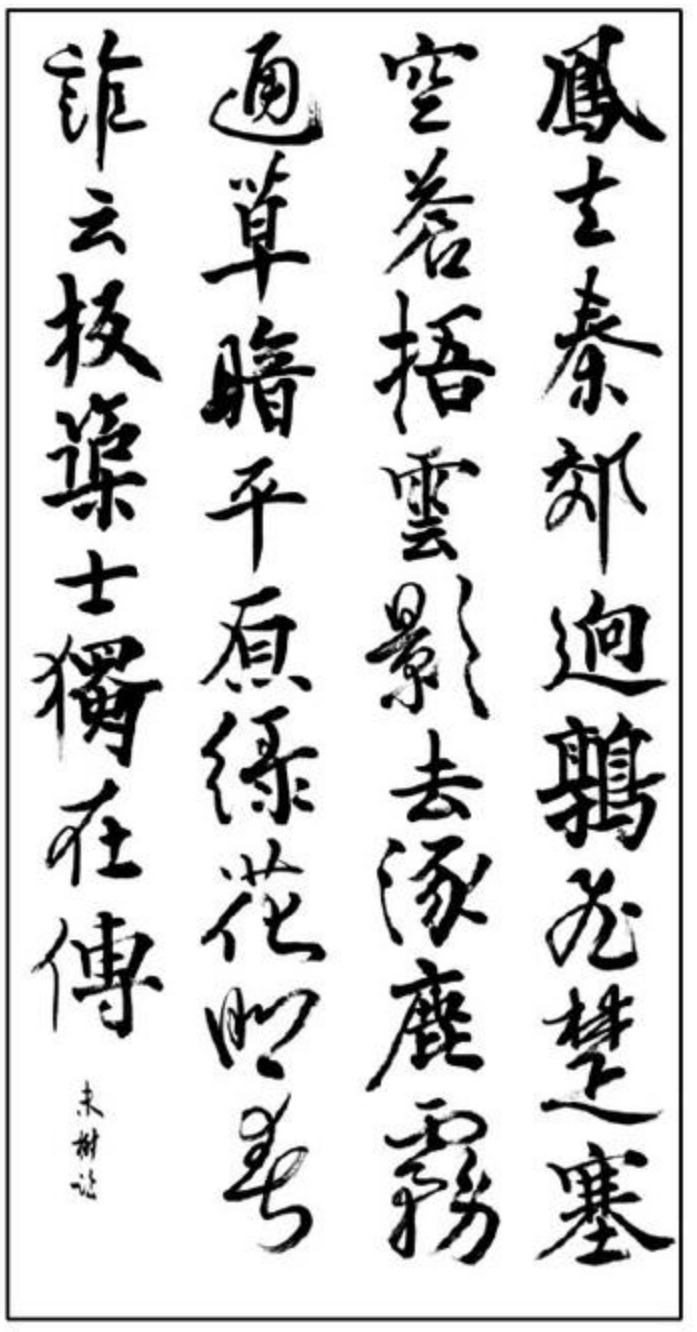
49

乾未樹　一回生

臨書　楷書・行書・草書　嵯峨天皇『李嶠雑詠残巻』　全紙

「鳳去秦郊迥、鶉飛楚塞空。蒼梧雲影去、涿鹿霧（略）通。草暗平原緑、花明春（略）。誰云板築士、獨在傳（略）」

書道部に入って八ヶ月ほど経ちました。しばらくは自分が良いなと感じる作品を臨書して、色々な事を学んでいきたいです。



50

内田鈴菜　二回生

臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「蓋聞。二儀有像。顯覆載以含生。四時無形。」

今年から書道を再開して、久々に行書を書いてみました。なかなか思い通りにはいかないものです。これからも精進します。



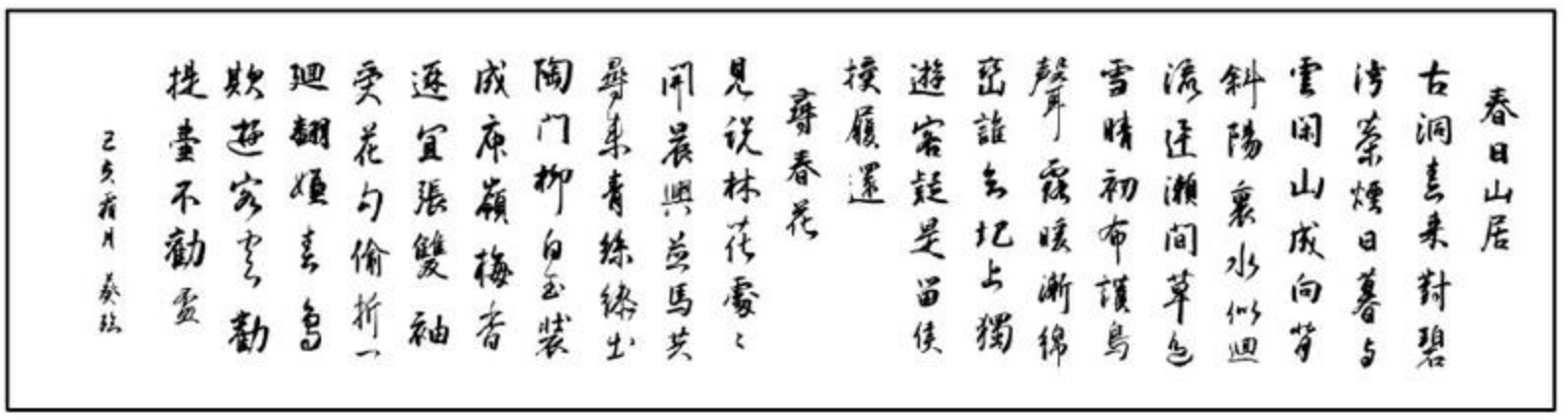
51

大橋葵　三回生

臨書　行書　小野道風『屏風土代』　巻子

「春日山居　古洞春来対碧湾茶煙日暮与雲閑山成向背斜陽裏水似廻流迅瀬間草色雪晴初布護鳥声露暖漸綿巒誰知圯上独遊客疑是留侯授履還……（略）」

今回は三蹟の一人、小野道風を臨書しました。書道部での書展も今回含めてあと三回、しっかり練習したかったのですが…（



52

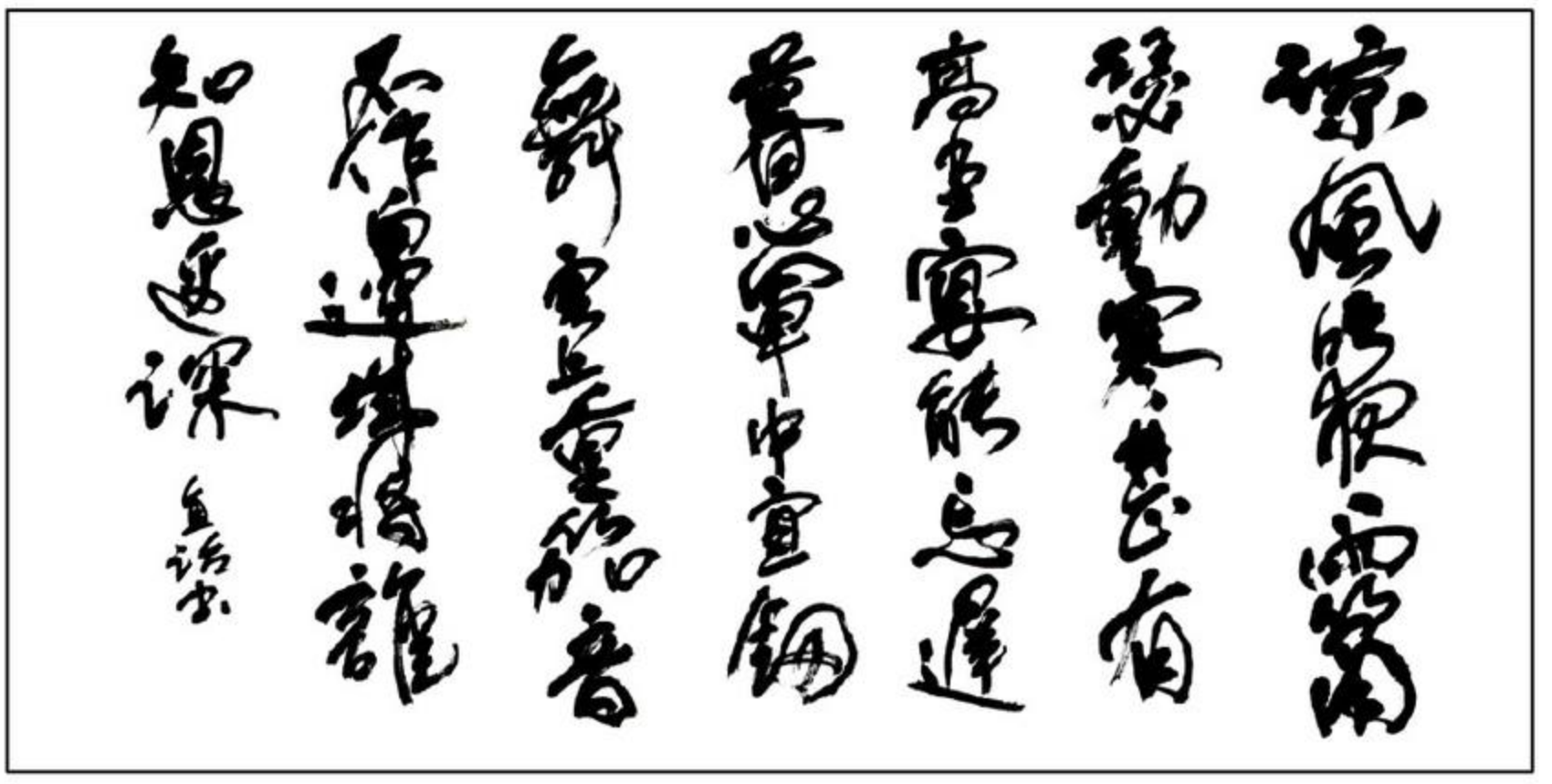
大橋明日香　一回生
臨書　行書　米芾『苕溪詩巻』　半切



「我若含情。漫有蘭隨色、寧無石對聲。」
かっこいい行書を臨書したいと思って選びました。一字一字の特徴はなんとなく掴んだつもりですが、全体のバランスが難しいです。
余談ですが、「全く同じ構成で今年の夏に書いた」と某先輩に言われたのに結局そのまま書き続けて完成させてしまいました。決して喧嘩を売ったりしていないことをここに表明しておきます。

53

覚道直治　四回生
創作　行書　『幽州夜飲』　三尺×六尺横



「涼風吹夜雨、蕭瑟動寒林。正有高堂宴、能忘遅暮心。軍中宜剣舞、塞上重笳音。不作邊城将、誰知恩遇深。」
政治的左遷をくらった作者が昔を懐かしむ的な詩です。まるで桂キャンパスに飛ばされた僕のようですね。けっこう大きく書いたんで見ていただけたらと思います。

54

金山優作　四回生
臨書　行書　何紹基『行草山谷題跋語四屏』　半切　四連

「荊州沙市舟中。久雨初霽。開北軒。以受涼。王子飛兄／弟来過。適有田氏嘉醞。問二客。皆不能酒。而予自／賛曰。能因濯古銅瓢。満酌飲之曰。飲此則為子書／匹帋。子予一舉覆瓢。因為楽筆不倦。」

私が初めて書いた何紹基の作品。高校二年生の時にこの作品に出会ってから自らの書道の方針みたいなものが決まった気がする。一つの切れ目である大学卒業制作にあたって再び臨書してみた。上達のほどやいかに。



55

釜田弘一朗　一回生
臨書　楷書　作者不詳『牛橛造像記』　半切

「妙楽自在之處。若有苦累。即令解脱。」

初めて造像記を書きました。細く、鋭い線が出せず苦労しました。



56

小池莉穂　三回生
臨書　楷書　智永『真草千字文』　半切

「草木頼及萬方盖此身髪四大五常恭」

三回生にもなっておきながら初の臨書作品です。



57

越田真由　三回生
創作　隷書　『桃源洞裡』　50cm×50cm　二連

「不追雞犬去昇天留住人間作嬾仙恰似五勞猶病酒藥欄風暖背花眠／桃源洞裡　看君終日常安臥何事紛紛去又回」

のんびり生きている怠け者ねこへのときめきをみなさんにも感じてほしくて書きました。





58

小林由佳　修士一回生
創作　行書　『風花』　葉書

「風花」

筆を持つ時間がめっきり減ってしまったこの頃ですが、久々に墨を磨って墨の香りに愈されながら書きました。

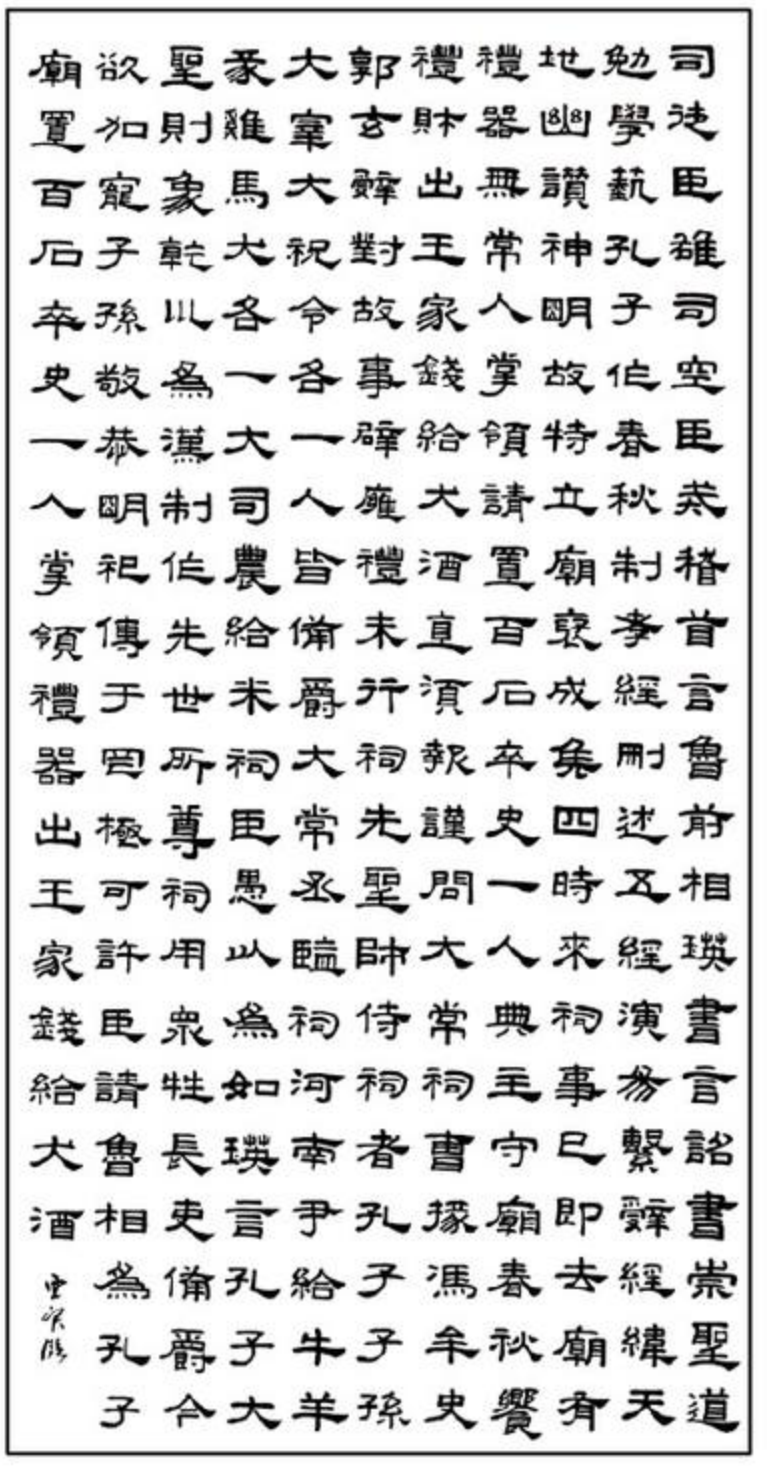


59

坂崎亜実　二回生
臨書　隷書　作者不詳『乙瑛碑』　全紙

「司徒臣雄司空臣戒稽首言。魯前相瑛……（略）」

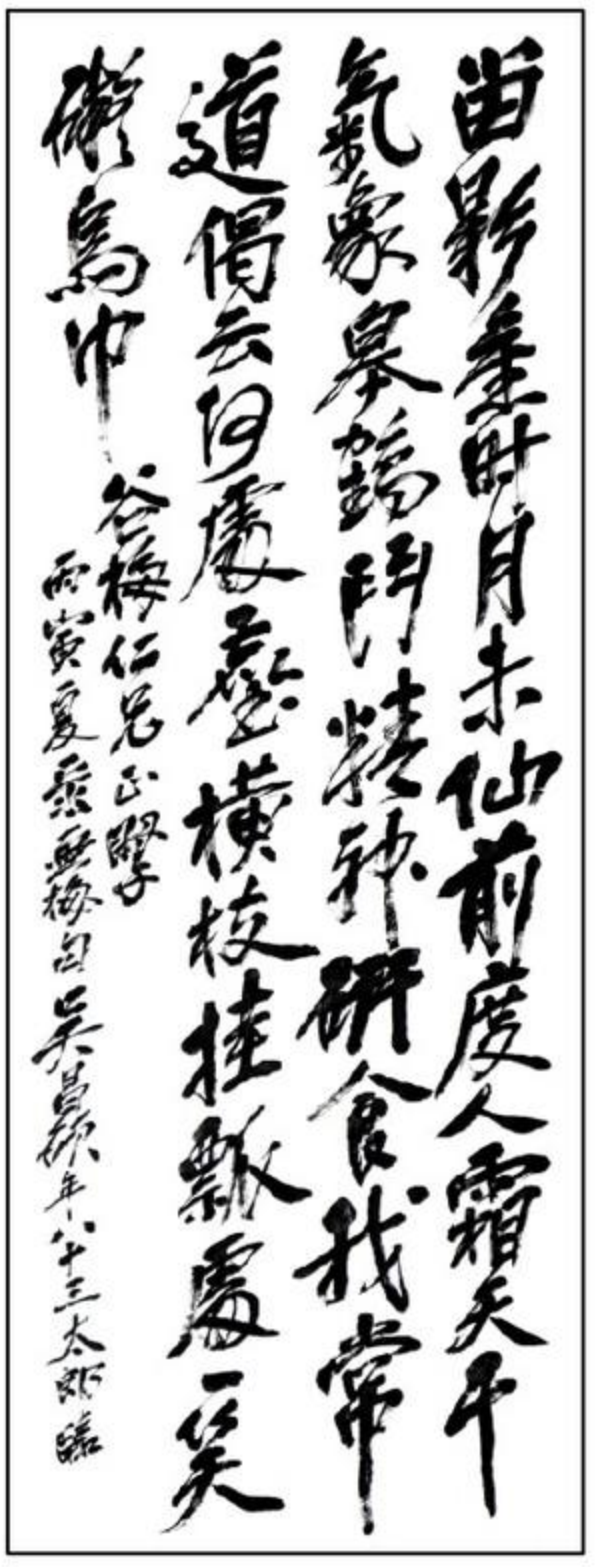
大学に入ってから四つ目の隷書作品ですが、バランスを取るのが今までで一番難しかったです。



60

杉山太郎　二回生
臨書　行草書　呉昌碩『五言律詩幅』　聯落

「留影舊……（略）」
呉昌碩はいいぞおじさん「呉昌碩はいいぞ」



61

鈴木和樹　二回生
臨書　行書　空海『風信帖』　半切

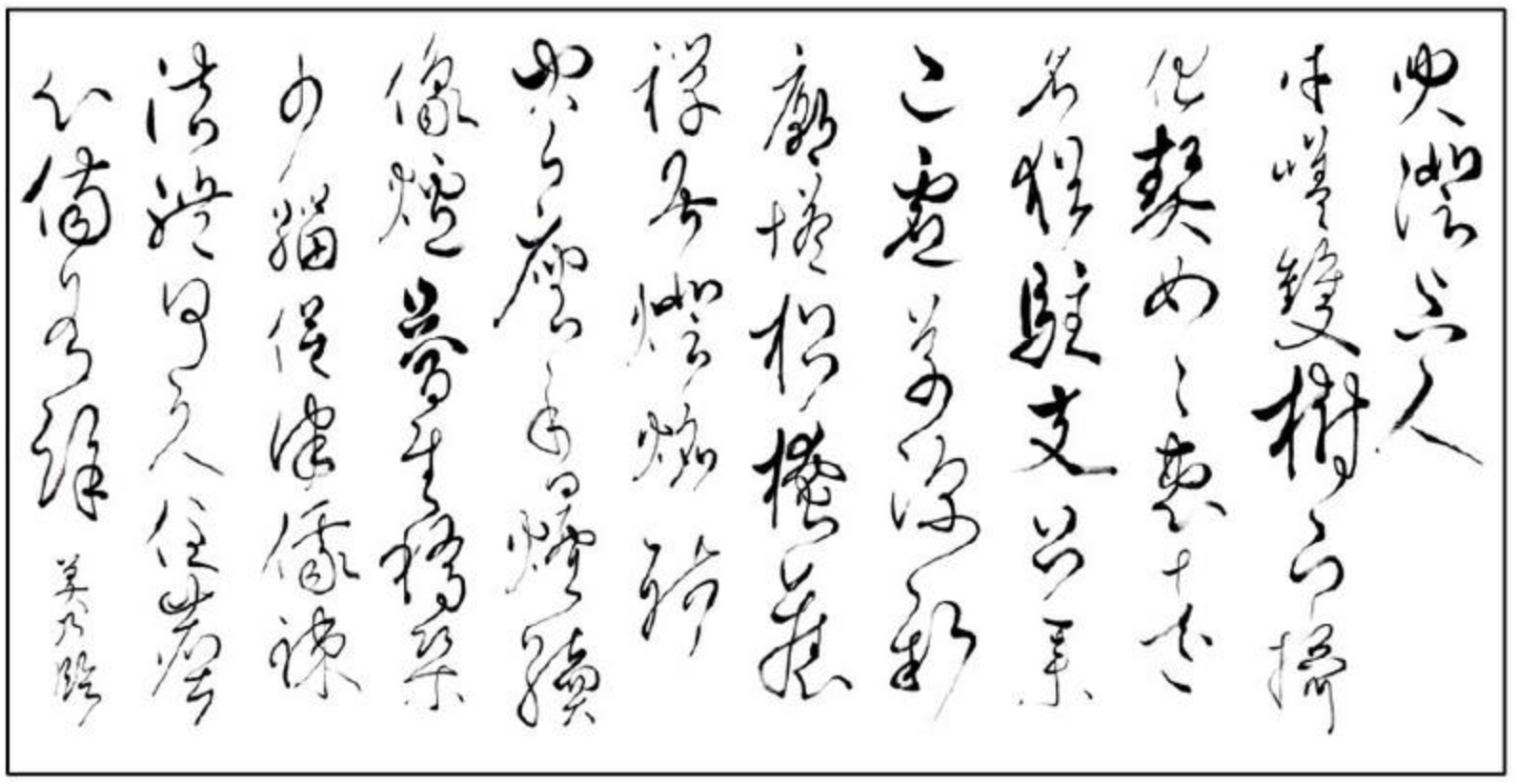
「風信雲書自天翔臨披之閲之如掲雲霧兼」
行書に挑戦しました。一文字目から難易度が高く、苦労しました。努力が足りないなと実感しました。



62

関美乃　一回生
臨書　草書　嵯峨天皇『哭澄上人詩』　全紙横

「哭澄上人。吁嗟双樹下、摂化契如々。……（略）」
理想と現実の差を痛感しました。次回の書展に向けて精進します。



63

豊留まり　一回生
臨書　楷書　顔真卿『自書告身』　半切

「忠讜罄于臣節貞規存乎士範述職中」
この前の書展で多宝塔碑を書いたので、同じ作者の別の作品を書いてみました。線を綺麗に引くのが難しかったです。ご批評よろしくお願いします。



64

仲村康太郎　修士一回生
創作　篆書　『毓』　色紙

「毓（＝育）」
「毓」は「育」と同音同義の別体である。字は西周早期の金文より採った。偏は母を、旁は子を表しており、原義は「子をうむ」、転じて「育てる」という意味になった。書もまた、感性を「育む」ものでありたい。この作品は、来春京都大学を退官される恩師平田昌司先生に贈ろうと思う。もっとも、先生は男性ではあるが……。



65

野口直哉　二回生
臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「大化初流我皇天寶之年寶塔斯建」
楷書のように整った生活を送りたいです。



66

挟間優美　四回生
臨書　楷書　鍾繇『薦季直表』　全紙

「臣繇言臣自遭遇先帝忝列腹心……（略）」
書道部に入って、色々好きなものが増えました。好きなものが増えると世界が広がって楽しいです。書道を好きになった原点であるこの作品のあざと可愛さが、やっぱり卒業制作に相応しかろうと、名残を惜しみつつ全臨しました。



（部分掲載）

67

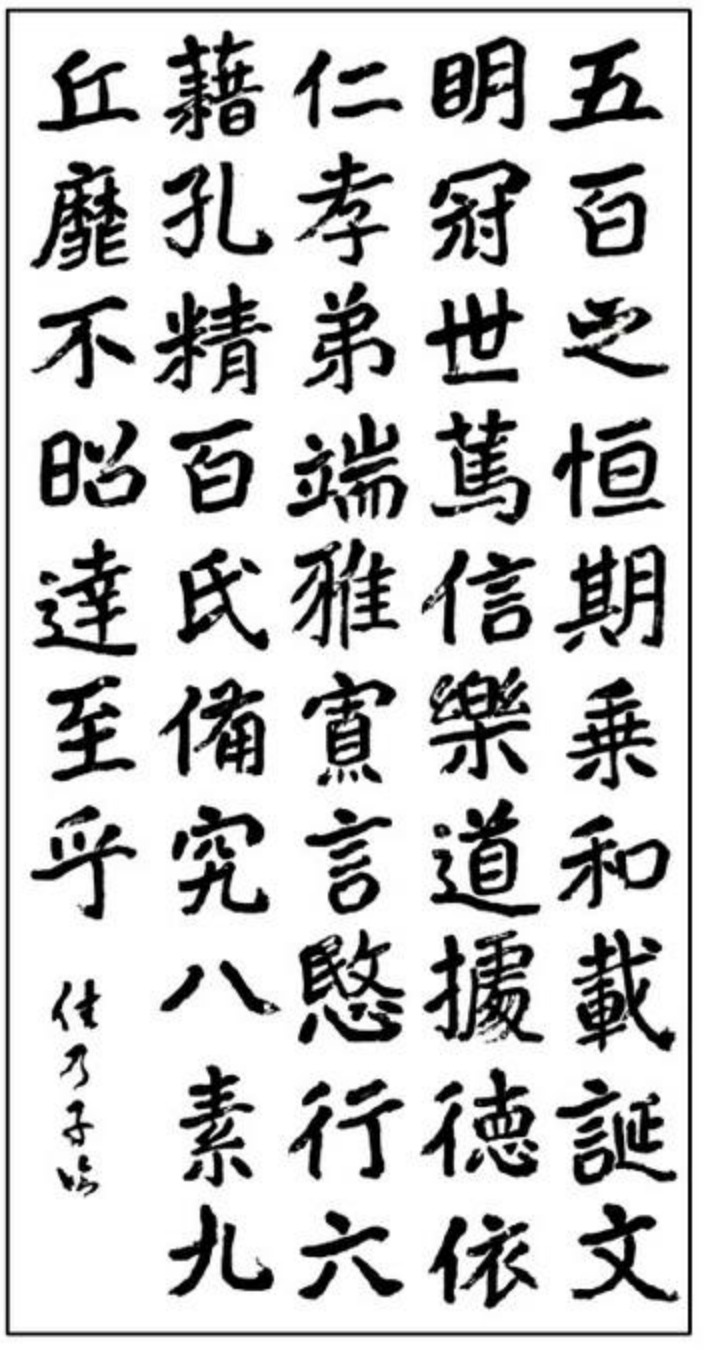
長谷佳菜子　修士一回生
創作　草書　『望雪』　半切



「凍雲宵遍嶺、素雪曉凝華。入牖千重砕、迎風一半斜。」
華やかな詩が書きたかったんですが、冬では難しいですね。好きな季節は春です。

68

服部佳乃子　二回生
臨書　楷書　鄭道昭『鄭羲下碑』　全紙



「五百之恒期。乘和載誕。文明冠世。篤信樂道。……（略）」
字の中にゆったりとした空間があるのが特徴です。忙しい日々の中でも、いつでも心にゆったりと余裕を持てたらいいなぁと思います。

69

原田拓実　修士一回生
創作　かな　『村上天皇の歌』　約35cm×100cm



「思へども猶あやしきは逢ふことのなかりし昔なに思ひけむ／山がつの垣ほにおふる撫子に思ひよそへぬ時のまぞなき／逢ふことはいつにかあらん明日香河さだめなき世ぞおもひわびぬる」
円形の少し変わった紙を見つけました。綺麗な紙に書くのは気分が上がりますね。

70

原誠人　修士一回生
臨書　篆書　『篆書の研究』　半紙

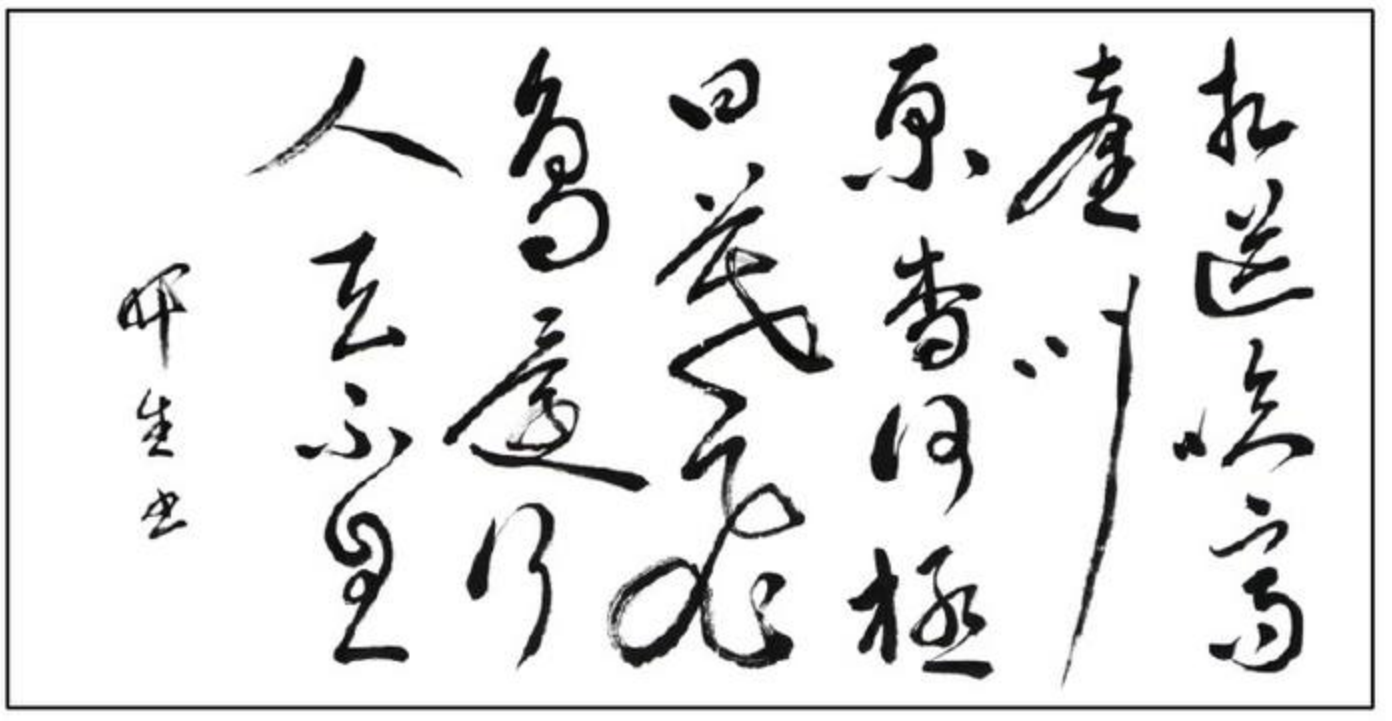


「雉兎」
夏休みに、ぼくは、ふしぎな女の子と出会いました。まず、その子と古いどうくつに行きました。少しドキドキしました。そして、どうくつを抜けると、そこには海があったのです。そこで、その子は、「ここが、私の生まれた場所。」と言い、海にとけてしまいました。しかし、なぜか、ここならとけてもいいな、と思いました。

71

二二暉生　四回生

創作　草書　『臨高臺』　半切二分の一横



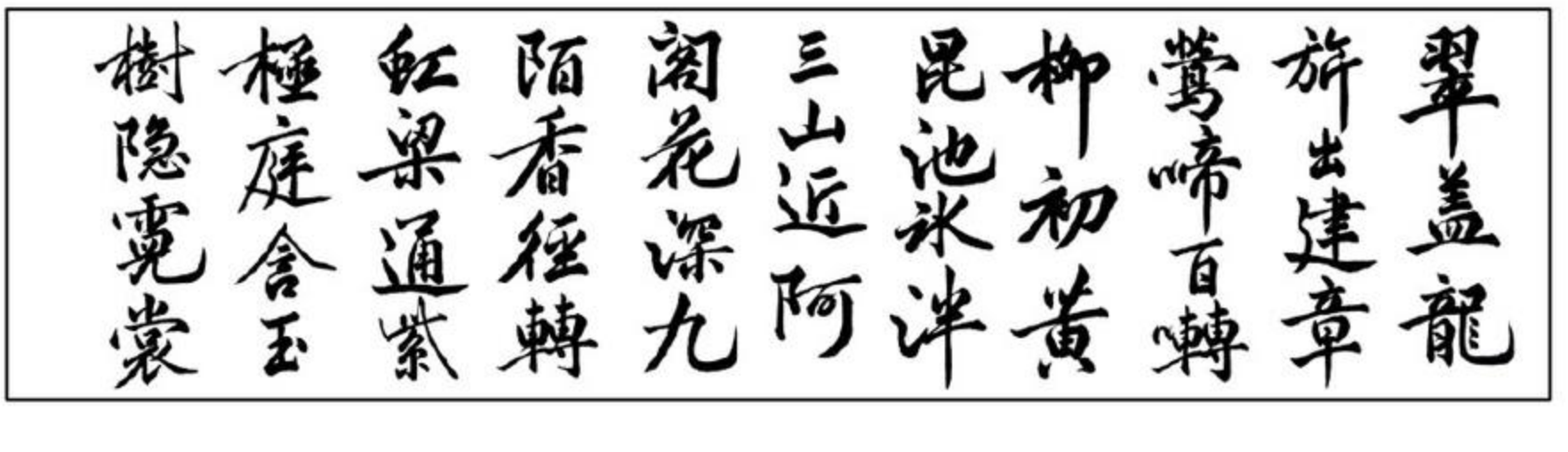
「相送臨高臺。川原杳何極。日暮飛鳥還。行人去不息。」

過去に訳あって日の目を見ることがなかった漢詩です。供養の念を込めて書きました。

72

平井達也　四回生

臨書　行書　黄庭堅『出宮賦』　巻子



「翠蓋龍旗出建章鶯啼百囀柳初黄昆池水泮…（略）」

最後の書展で初めての行書作品です。書道の花形とも言える行書を書かずに卒業してしまうのは何だか惜しい気がしたので書きました。

73

藤井基弘　博士課程修了

創作　調和体　『雨ニモマケズ』　全紙横

「雨ニモマケズ　風ニモ負ケズ　雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ……（略）」今まで取り組んでこなかった「調和体」に挑戦しました。さらに宮沢賢治のこの詩が、1）飽食の時代と言われている今の時代　2）周囲の人間関係が殺伐とした現代に再度読み返すことに意義があると思いました。

雨ニモ負ケズ

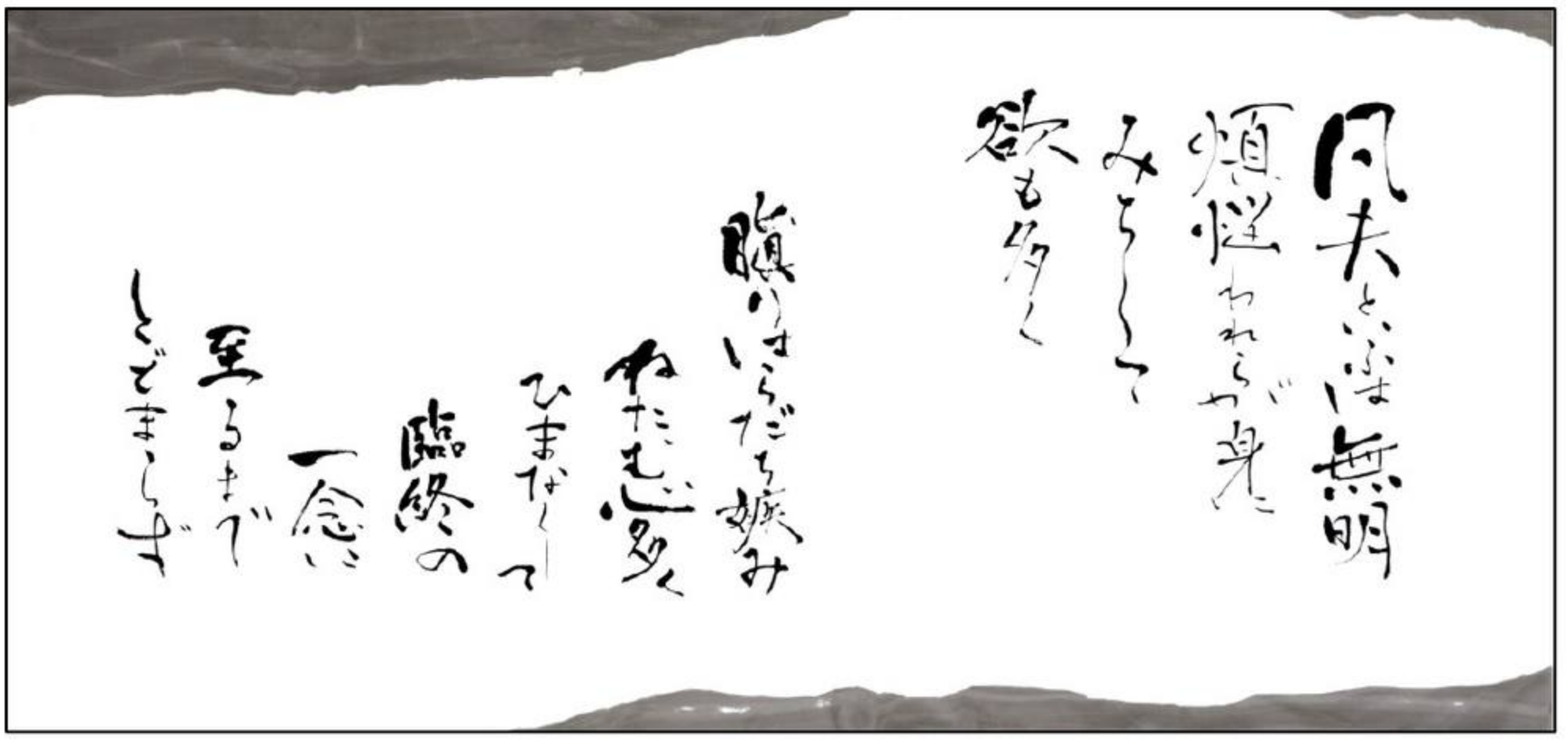
雨ニモ負ケズ　風ニモ負ケズ
雪ニモ　夏ノ暑サニモ負ケズ
丈夫ナ体ヲ持チ
慾ハナク
決シテ怒ラズ
イツモ静カニ笑ツテヰル
一日ニ玄米四合ト　味噌ト少シノ
野菜ヲ食ベ　諸有事ヲ
自分ヲ勘定ニ入レズニ
ヨク見聞キシ　分カリ
ソシテ　忘レズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ小サナ茅葺キ
小屋ニイテ
東ニ病気ノ子供アレバ　行ツテ
看病シテヤリ
西ニ疲レタ母アレバ　行ツテソノ
稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニソウナ人アレバ　行ツテ
怖ガラナクテモイイト言ヒ
北ニ喧嘩ヤ訴訟ガアレバ
ツマラナイカラ止メロト言ヒ
日照ノ時ハ　涙ヲ流シ
寒サノ夏ハ　オロオロ歩キ
皆ンナニ木偶ノ坊ト呼バレ
褒メラレモセズ
苦ニモサレズ
ソウイウ者ニ
私ハナリタイ

74

森ちひろ　四回生

創作　調和体　『凡夫』　二尺×四尺横

「凡夫といふは無明、煩悩われらが身にみちみちて欲も多く、いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心多くひまなくして、臨終の一念に至るまでとどまらず……（略）」浄土真宗の宗祖である親鸞聖人が八五歳の時に書いた『一念多念文意』という書物の一部を作品にしました。「煩悩にまみれた私たちは、摂取不捨の利益にあずかろうとも、今の命が終わるまさにその時まで煩悩が無くなることはない。」しびれるお言葉です。



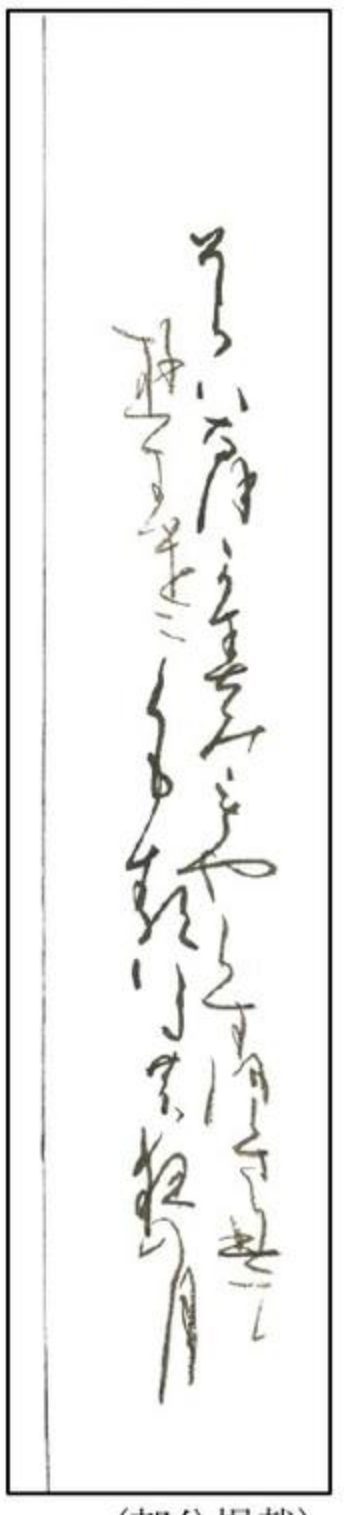
75

矢野凱己　修士二回生

創作　かな　『月を詠む』　半切二分の一

「空はなほ　霞もやらず　風さえて　雪げに曇る　春の夜の月」　他二首

あと少しで京都で見る月ともお別れ……。



（部分掲載）

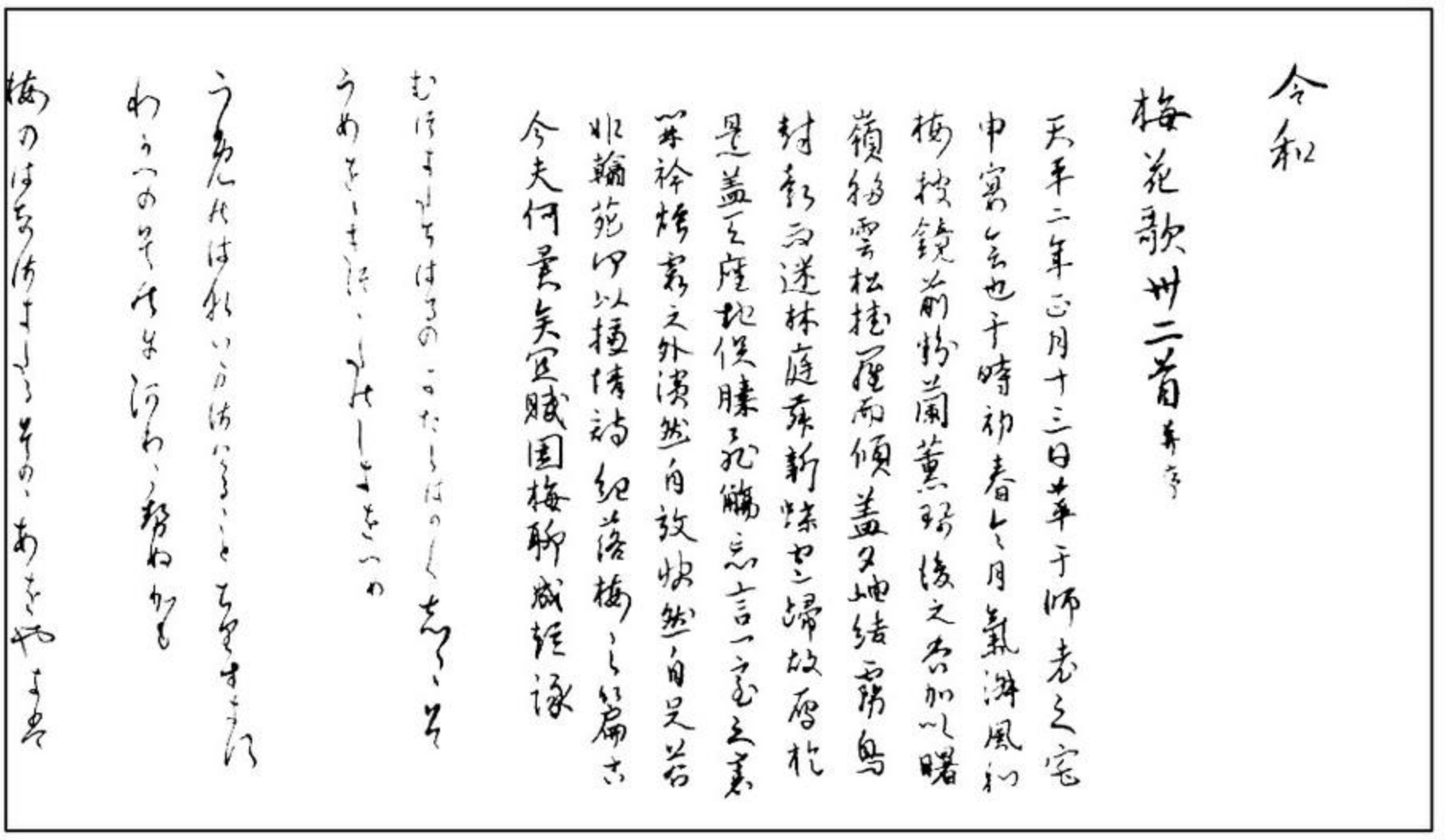
76

吉田凌祐　三回生

創作　かな　『令和―梅花歌卅二首并序―』　巻子

「令和／梅花歌卅二首并序／天平二年正月十三日、萃于師老之宅、申宴会也。于時初春令月、気淑風和。…（中略）…宜賦園梅聊成短詠。／むつきたちはるのきたらはかくしこそうめをきつつたのしきをへめ／……（以下卅一首略）」

令和元年も残すところあと少しとなりました。その令和は発表されたときに、その出典が萬葉集であることもあわせて公表されました。典拠の部分を選び、すべてかな作品として創作しました。これからの令和の時代の平和と発展を願って。

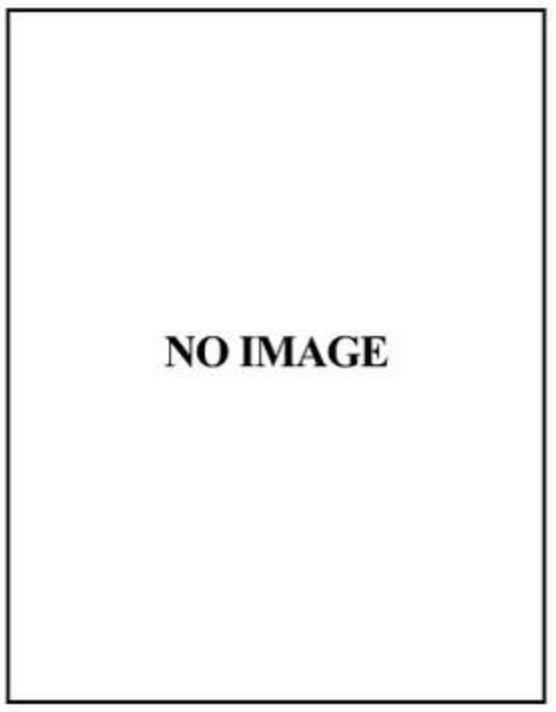


（部分掲載）

77

阿部朱夏　修士一回生・原誠人　修士一回生
創作　調和体　『ray』　60cm×85cm

「晴天とはほど遠い……（略）／〇×△どれかなんて……（略）」
今が未来だった頃、踵を四つ同じ畳の上に並べて二日間を過ごしました。理想で作った道を現実が塗り替えていくのを眺めながら、その軌跡の上で輝きになって残っている思い出を時たま思い返して語り合うような、そんな錆び付いた車輪による合作です。ご笑覧ください。

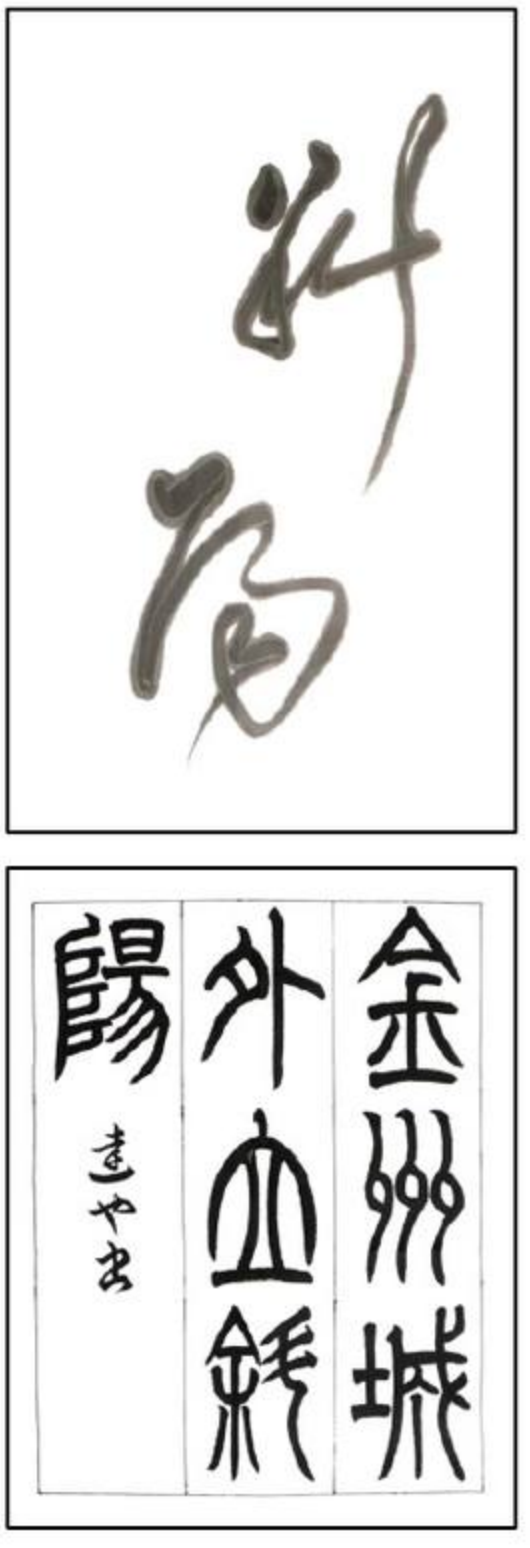


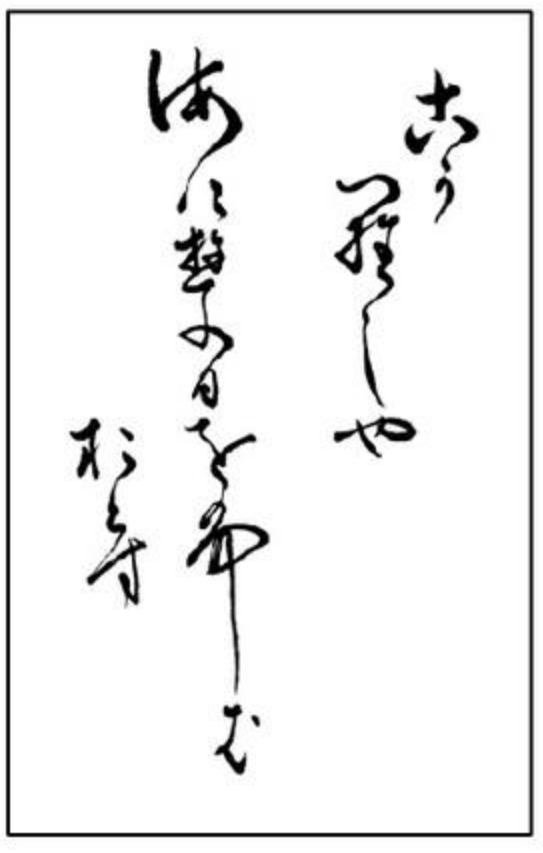
78

勝野初紀　四回生・平井達也　四回生
創作　草書・篆書・隷書・かな　『斜陽』　36cm×100cm　二連

「空斜陽／金州城外立斜陽／夕日無限好隻是近黄昏／凩や海に夕日を吹き落とす」
太宰治の同名小説から着想を得ています。一回生で合作をして以来、それぞれが「隷書」と「篆書」に磨きをかけてきました。その集大成をご覧ください。
« Le soleil se lève aussi, il faut tenter de vivre. »





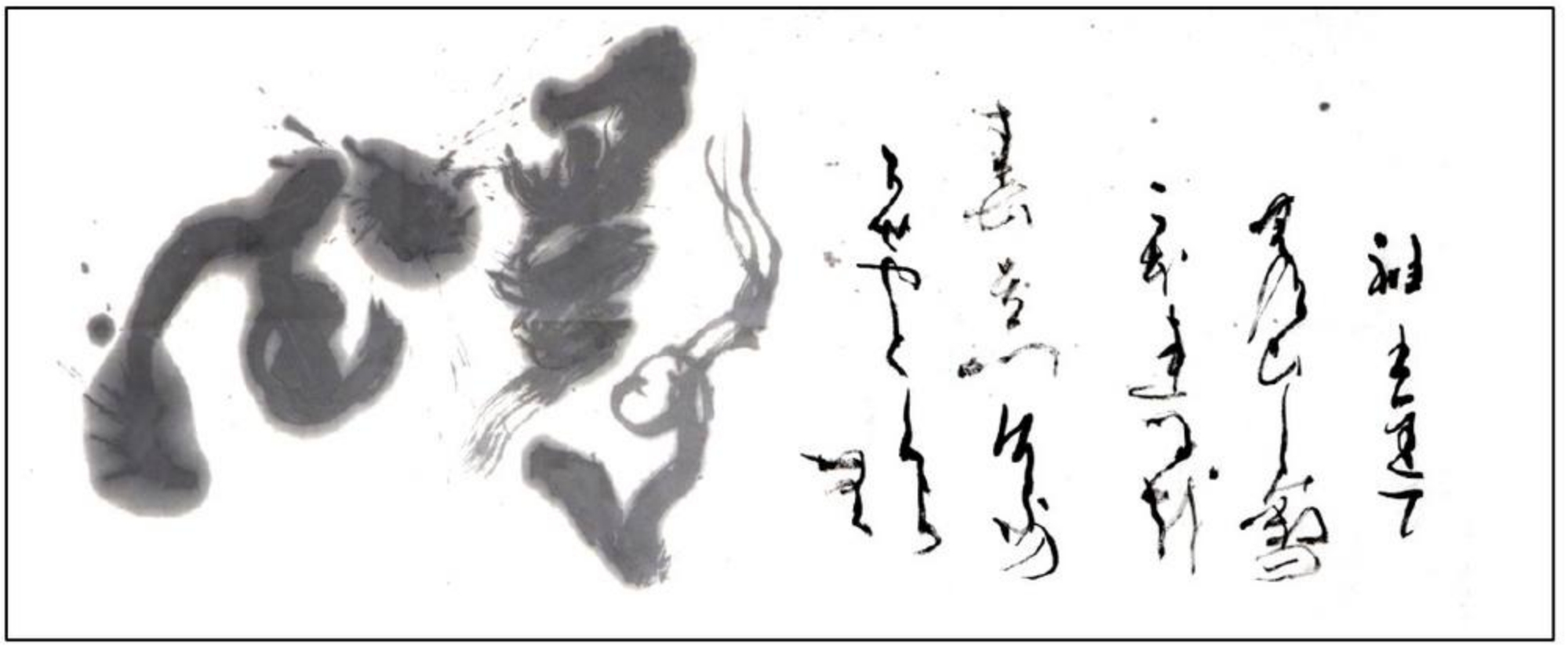


79

矢野凱己　修士二回生・山口和樹　修士二回生
創作　かな・大字　『永遠に』　二・六尺×六尺横

「袖ひちて　むすびし水の　こほれるを　春立つけふの　風やとくらむ」「環」

あの合作コンビ〝きんかん〟が今季限りでの引退を発表。これまでに八作品をリリースし、常に新しい構成に挑み続けてきた。そんな彼らだが、最後の作品構成は原点回帰。本作ではデビュー作『一逢』のアンサーワークとして、彼らが積み上げてきたものを昇華させるようだ。彼らの集大成を見逃すな！



【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科　宇佐美文理
京都大学人文科学研究所図書掛　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書家　寺本蒼玄

一回生

医　石田七彩
農　乾未樹
文　大橋明日香
医　片岡美緒
医　釜田弘一朗
法　栗原瑞樹
医　近藤毅
工　佐藤有造
京女　鈴木翔子
工　鈴木翼
法　関美乃
文　豊留まり
経済　益満朋佳
農　松岡柚花
教育　藍予智

二回生

理　秋友祥香
農　穴田小恵
総人　伊藤迅亮
工　稲葉皓信
農　岩田恵理子
総人　内田鈴菜
農　小笠原萌葉
医　岸根葵葉
工　北田綾
工　坂崎達哉
農　柴田英行
工　洲鎌太郎
文　杉山和樹
工　鈴木嵩晴
工　豊永紀保子
法　中村直哉
工　野口航太
工　野宮佳乃子
農　服部真之介
総人　宮本奈実
法　森島裕貴
工　渡部

三回生

文　石本森羅
工　市川拓真
工　鵜川大輝
文　牛田聡実
法　大橋葵
農　小池莉穂
工　越田真由
法　坂本和歌子
文　寺田奈津美
同志社　中岡大吉
工　中林亮
同志社　野田恵子
工　松尾有輝也
工　安田直記
理　吉田凌祐

四回生

法　安達光寿
工　覚道直治
京先　勝野初紀
法　金岡杏祐
工　金山優作
工　金祺民
工　邢書禹
医　佐山侑莉
法　建部壮一郎
理　中村勇真
文　挾間優美
工　一二暉生
文　平井達也
ダム女　別府華
法　村上友梨
京女　森ちひろ
農　吉岡智志

六回生

医　岡本晴香
府医　木高早紀

修士一回生

工　阿部朱夏
医　今村朱里
工　郡健一郎
農　小林由佳
文　佐武千寛
工　角裕介
文　仲村康太
工　橋詰都
農　長谷佳菜
理　原誠人
工　原田拓実
法　平野晶子郎

修士二回生

農　木下有羽
医　下坂桃代子
人環　薛楽
薬　竹内春佳
文　張玉馨

博士一回生

理　上西隆太
農　釜阪紘平
理　疋田研一郎

博士三回生

法　大泉陽輔
医　川上澄香

博士課程修了

地環　藤井基弘

工　ハンナ
人環　深谷拓未
農　堀場菜摘
法　三村祐貴子
工　宮部大志
工　矢野凱己
地環　山口和樹
工　山科直也
工　渡辺顕

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
〈日曜・祝日定休〉

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ http://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町３７
TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島5-14-6 クレセントビル2F
TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町164
TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802

LINE@
お得なクーポン、SALE情報の配信！
道具の豆知識を共有！得すること間違いなし。
「友達追加」で QRコードを選択！ もっと書道が 楽しくなるLINE@

京都・書道用具店
松楳園
一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。

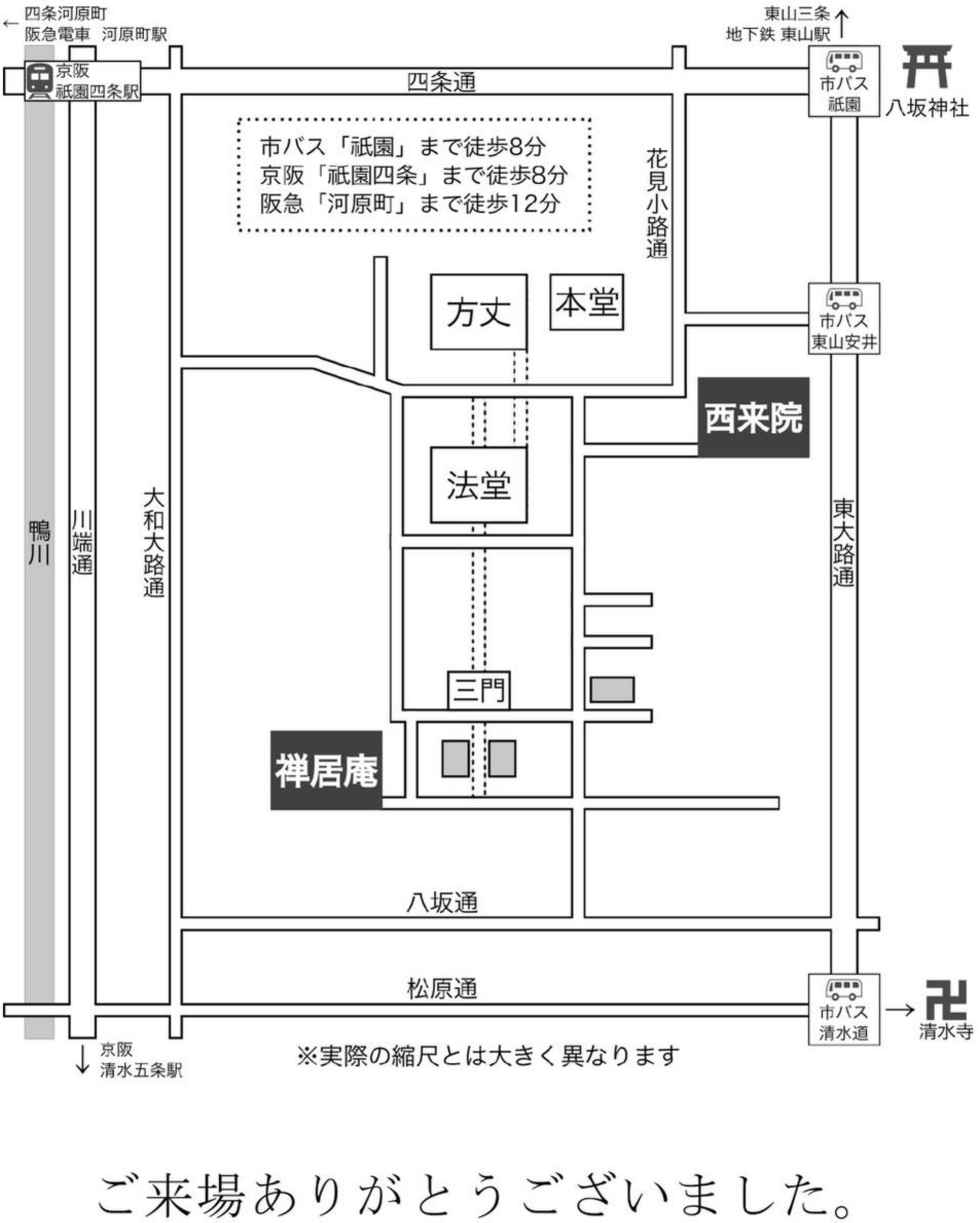
取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006
http://www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路
上ル下本能寺前町520
営業時間 10～18時 定休日(日曜日)
TEL. 075(231)0510 FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車5番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

文具四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交（さんこう）
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
URL：http://www.shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部